

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 37 冊

大吉山瓦窯跡 I



宮城県多賀城跡調査研究所

序 文

多賀城跡調査研究所では、特別史跡多賀城跡附寺跡の継続的な調査を行うとともに、古代多賀城を多角的に研究するため、多賀城と密接に関連する県内の城柵官衙遺跡、生産遺跡などの発掘調査を多賀城関連遺跡発掘調査事業として、昭和49年から年次計画に基づき実施しています。

当研究所では、この方針に基づき大崎地方に分布する多賀城政庁跡第Ⅰ期の窯跡群の内容解明を目的として、大崎市下伊場野窯跡群、大崎市木戸窯跡群、色麻町日の出山窯跡群の発掘調査を実施してきました。その結果、窯の分布や構造など詳細な内容を把握することができたとともに、多賀城との関連を考える上で貴重な成果が得られました。

平成23年度に大崎市大吉山瓦窯跡の調査を計画していましたが、東日本大震災の発災により事業が中止となり、その後は県内の復興事業に伴う発掘調査の支援への職員派遣を優先し、令和2年度までの10年間にわたり事業を休止しました。

今年度から事業を再開することとなり、第8次5ヵ年計画3年次目として大吉山瓦窯跡の第1次発掘調査を実施しました。本窯跡はこれまでに発掘調査がなされていないことから、窯跡の内容を具体的に把握するために発掘調査と地形測量を実施しました。調査の結果、窯8基とそれらに伴う灰原を検出し、窯の分布状況を把握することができました。

本書の刊行にあたり、日頃よりご指導をいただいている多賀城跡調査研究委員会の諸先生、文化庁、調査の共催を快諾していただいた大崎市教育委員会、調査に対しご支援を頂いた地元行政区をはじめ皆様方に対し、所員一同深く感謝を申し上げます。

令和4年3月

宮城県多賀城跡調査研究所

所 長 高橋 栄一

目 次

I . 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画

- 1. 事業の目的 1
- 2. 第8次5ヵ年計画 1

II . 大吉山瓦窯跡の概要

- 1. 遺跡の位置と周辺の遺跡 3
- 2. 大吉山瓦窯跡の発見 6

III . 大吉山瓦窯跡第1次調査

- 1. 調査の目的 10
- 2. 調査の方法と経過 10
- 3. 測量調査の成果 11
- 4. 調査区の設定と基本層序 13
- 5. 発見した遺構 13
 - (1) 窯 (2) 灰原
- 6. 出土遺物 26
 - (1) 瓦 (2) その他の出土遺物
- 7. 総括 39
 - (1) 遺構 (2) 瓦

図目次

第1図	多賀城第I期の瓦生産遺跡と供給先 1
第2図	遺跡の位置と周辺の遺跡 4
第3図	大吉山瓦窯跡周辺の地形と遺跡分布 5
第4図	大吉山瓦窯跡指定当時の地形図 5
第5図	昭和40年代採集遺物(1) 7
第6図	昭和40年代採集遺物(2) 8
第7図	基準点の設置と地形図の作成 12
第8図	調査区の設定と基本層序 14
第9図	遺構配置図 15
第10図	遺構平面図(1) 16
第11図	遺構平面図(2) 17
第12図	遺構断面図(1) 18
第13図	遺構平面図(3) 22
第14図	遺構平面図(4) 23
第15図	遺構断面図(2) 24
第16図	丸瓦 28
第17図	平瓦(1) 30
第18図	平瓦(2) 31
第19図	平瓦(3) 32
第20図	隅切瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼板 33

第21図	土器・石製品 35
第22図	検出した窯と灰原の分布 40
第23図	旧地形と窯の立地 41
第24図	二重弧文軒平瓦511-aの比較 44
第25図	鬼板950Cの比較 45

表目次

表1	第8次5ヵ年計画【変更前】 2
表2	第8次5ヵ年計画【変更後】 2
表3	昭和40年代採集遺物観察表 8
表4	出土瓦点数集計表 27
表5	出土瓦重量集計表 27
表6	出土瓦(第16～20図)観察表 34
表7	出土土器・石製品点数集計表 35

写真図版目次

写真図版1	昭和40年代採集遺物 9
写真図版2	遺構写真(1) 19
写真図版3	遺構写真(2) 25
写真図版4	遺物写真(1) 36
写真図版5	遺物写真(2) 37
写真図版6	遺物写真(3) 38

例 言

1. 本書は、令和3年度に実施した多賀城関連遺跡発掘調査事業（大吉山瓦窯跡第1次調査）の成果を収録したものである。
2. 当研究所が実施する多賀城関連遺跡の発掘調査については、多賀城跡調査研究委員会の審議と承認により、年次計画に基づいて実施している。
3. 本遺跡の測量については世界測地系の平面直角座標系第X系に基づく。
4. 本書における平面図のグリッドについては、X=-152800、Y=7600を原点として表記した。
5. 本書で使用した遺構記号は、SR：窯である。
6. 土色は『新版 標準土色帖 17版』（小山正忠・竹原秀夫 1996）を参照した。
7. 瓦の分類・型番は『多賀城跡 政庁跡 本文編』（宮城県多賀城跡調査研究所 1982）に依拠した。
8. 当研究所の刊行物については、『多賀城跡 政庁跡 本文編』（1982）を『本文編』、『多賀城跡 政庁跡 図録編』（1980）を『図録編』、『多賀城跡 外郭跡 I—南門地区—』（2017）を『外郭 I』、『多賀城関連遺跡発掘調査報告書』は第19冊を『関連 19』、複数冊にまたがる場合は『関連 30～32』のように記した。また、『多賀城跡調査報告 I—多賀城廃寺跡—』（宮城県教委・多賀城町 1960）は『廃寺跡』と記した。
9. 本調査で得られた資料は宮城県教育委員会で保管している。
10. 本書の内容の一部は『大吉山瓦窯跡第1次発掘調査 現地公開資料』、『令和3年度宮城県遺跡調査成果発表会資料集』、『第48回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』で紹介しているが、本書の内容が優先する。
11. 本書の整理作業は、遺構を初鹿野博之、遺物を初鹿野と矢内雅之・柴田とみ子が担当した。
12. 本書の作成にあたっては、所員全員の検討を経て、初鹿野が執筆・編集した。なお、II-2で紹介している昭和40年代採集遺物については、共催機関である大崎市教育委員会のご協力をいただき、早川文弥が執筆した。

調査要項

大吉山瓦窯跡第1次調査の要項は下記の通りである。

所在地	宮城県大崎市古川小林字浦越2の12
調査指導	多賀城跡調査研究委員会（委員長 佐藤 信）
調査主体	宮城県教育委員会（教育長 伊東昭代）
調査共催	大崎市教育委員会（教育長 熊野充利）
調査担当	宮城県多賀城跡調査研究所（所長 高橋栄一） 大崎市教育委員会文化財課（課長 横山一也）
調査員	初鹿野博之・矢内雅之（宮城県多賀城跡調査研究所） 大谷 基・早川文弥（大崎市教育委員会文化財課）
調査期間	令和3年6月1日～8月6日
調査面積	対象面積：約2,180㎡ 発掘調査面積：約145㎡
調査参加者	笠原久子・高橋修逸・中鉢 栄・橋本あきえ・橋本 清 （宮城県会計年度任用職員：6月1日～8月6日） 小野亜矢・古川史佳・岡田彩奈・三島孝子・新行内ゆり子・大友弘子・鈴木さゆり （大崎市教育委員会文化財課：6月15日）
整理参加者	柴田とみ子・菊地摩耶（宮城県会計年度任用職員）
調査協力	向三丁目行政区（二階堂進区長）・小林上行政区（今野睦男区長）・周辺地権者5名

I. 多賀城関連遺跡発掘調査事業の計画

1. 事業の目的

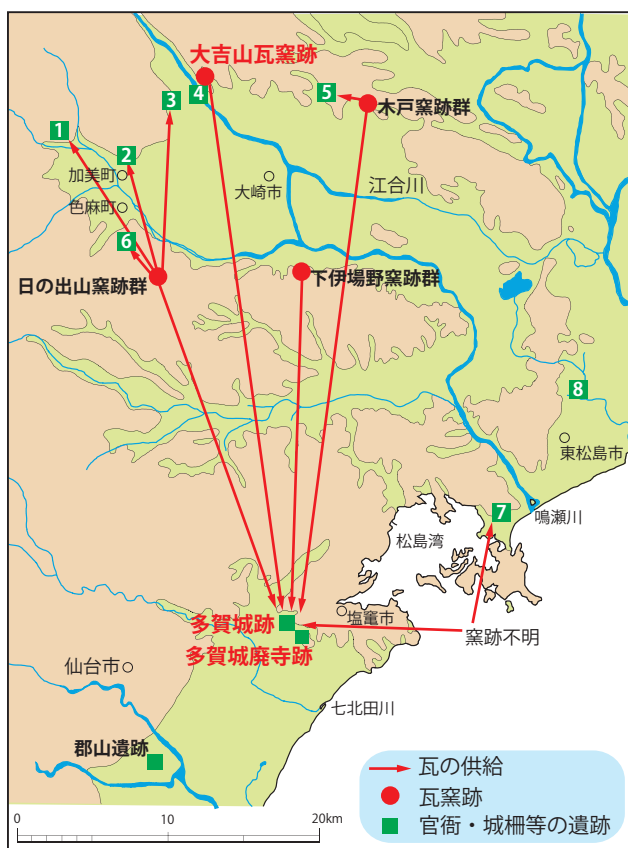
当研究所では特別史跡多賀城跡附寺跡の調査研究と併行して、多賀城と密接に関連する県内の城柵官衙遺跡や生産遺跡の調査研究を、昭和49年から継続的に実施している。この事業は古代の陸奥国、及び出羽国を統治する中心的な役割を果たした多賀城を多角的に調査・研究するとともに、関連する遺跡の解明と保存・活用を目的としている。

2. 第8次5カ年計画

多賀城関連遺跡の発掘調査は、多賀城跡調査研究委員会の指導に基づき5カ年計画を立てて実施している(表1)。第8次5カ年計画では、第7次に引き続き、大崎平野に分布する多賀城政庁跡第I期(以下、「政庁跡」を省略)の窯跡群の発掘調査を実施している。第I期における瓦生産の様相を具体的に把握し、当該期窯跡群の実態と特徴を捉えることで、多賀城との関連、工人集団とその体制、社会的背景等の諸問題を究明することを目的としている。併せて、第9次5カ年計画に向けて、大崎平野北辺に連なるように分布する城柵官衙遺跡の実態を具体的に把握することを目的に、それらを囲む土塁群を中心とした分布調査等を実施している。

多賀城第I期の窯跡群の調査は、平成5年度の大崎市下伊場野窯跡群の調査(『関連19』)に始まり、16～18年度には大崎市木戸窯跡群(『関連30～32』)、19～22年度には色麻町日の出山窯跡群(『関連33～36』)の調査を実施してきた(第1図)。平成23年度には、第8次5カ年計画3年次目として、大崎市大吉山瓦窯跡を調査する計画となっていたが、東日本大震災の発生により中止を余儀なくされた。その後は、県内の復興事業に伴う発掘調査支援への職員派遣を優先させたため、事業は10年間休止していたが、令和2年度の集中復興期間終了に伴い、令和3年度から事業を再開することとした。

令和3年度は、休止していた第8次5カ年計画3年次目にあたり、大吉山瓦窯跡の第1次調査として、測量調査・発掘調査を実施した。事業費は2,824千円(国庫補助率50%)である。当初の計画では、3年次目と4年次目に大吉山瓦窯跡の調査を2カ年かけて行い、最終年次に第I期窯跡群の総括報告書を刊行する予定であったが、今年度の調査の結果、想定以上に窯の数が多く、残存状況が良いこと



1. 東山官衙遺跡 2. 城生柵跡・菜切谷廃寺跡 3. 名生館官衙遺跡・伏見廃寺跡
4. 小寺・杉の下遺跡 5. 新田柵跡 6. 一の関遺跡 7. 亀岡遺跡 8. 赤井遺跡

第1図 多賀城第I期の瓦生産遺跡と供給先

が明らかになったため、大吉山瓦窯跡の調査を令和5年度まで行うように変更し、総括報告書刊行を第9次5カ年計画1年目に繰り越すこととした(表2)。この計画変更については、令和3年10月19日の「令和3年度多賀城跡調査研究委員会」で了承を得ている。

年次	年度	遺跡名	調査内容	対象面積 (㎡)	発掘面積 (㎡)	備考
1	平成21年	日の出山窯跡群	F地点第2次調査	4,425	620	調査地選定
		城柵官衙遺跡分布調査	城山裏土塁跡発掘調査			
2	平成22年	日の出山窯跡群	F地点第3次調査	2,000	320	調査地選定
		城柵官衙遺跡分布調査	城山裏土塁跡発掘調査			
平成23年～令和2年 事業休止						
3	令和3年	大吉山瓦窯跡	第1次調査	2,180	150	調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			
4	令和4年	大吉山瓦窯跡	第2次調査	(予定)2,180	(予定)300	調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			
5	令和5年	創建期窯跡群	総括報告書の作成			調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			

表1 第8次5カ年計画(変更前:令和元年度承認)

年次	年度	遺跡名	調査内容	対象面積 (㎡)	発掘面積 (㎡)	備考
1	平成21年	日の出山窯跡群	F地点第2次調査	4,425	620	調査地選定
		城柵官衙遺跡分布調査	城山裏土塁跡発掘調査			
2	平成22年	日の出山窯跡群	F地点第3次調査	2,000	320	調査地選定
		城柵官衙遺跡分布調査	城山裏土塁跡発掘調査			
平成23年～令和2年 事業休止						
3	令和3年	大吉山瓦窯跡	第1次調査	2,180	150	調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			
4	令和4年	大吉山瓦窯跡	第2次調査	(予定)2,180	(予定)300	調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			
5	令和5年	大吉山瓦窯跡	第3次調査	(予定)2,180	(予定)400	調査地選定
		城柵官衙遺跡	分布調査			

表2 第8次5カ年計画(変更後:令和3年度承認)



【表紙の写真】上空からみた大吉山瓦窯跡(北から)

Y2538

Ⅱ. 大吉山瓦窯跡の概要

1. 遺跡の位置と周辺の遺跡

大吉山瓦窯跡は、宮城県大崎市古川小林に所在し、J R古川駅から北西に7.1km、江合川の左岸に沿って北西から南東方向に延びる清滝丘陵の南端部付近、標高40～50mの南東斜面に立地する。瓦の供給先である多賀城までは直線距離で約35km離れており、日の出山・木戸・下伊場野の各窯跡群からは10～15kmの距離にある(第1図)。周辺の丘陵および南東側に広がる自然堤防には、古墳時代～古代の遺跡が多数分布している(第2図)。以下、主に『古川市史6』(2006)を参考に紹介する。

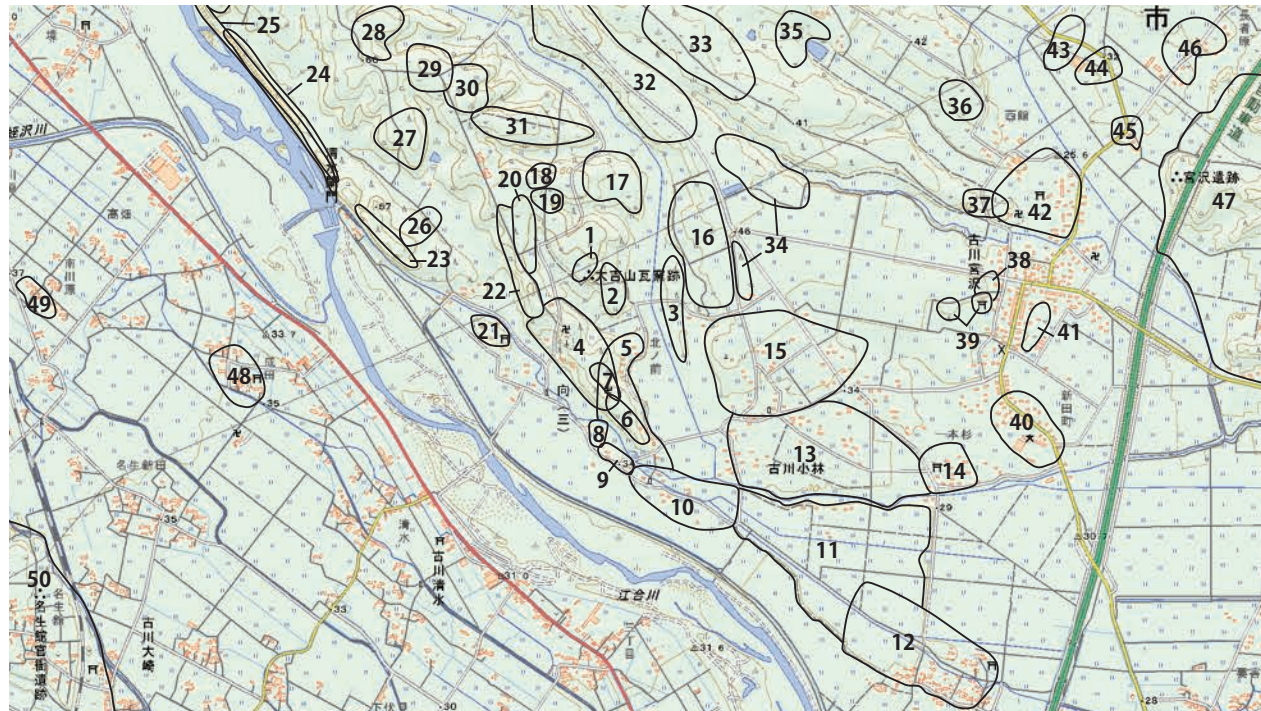
古墳時代後期～終末期にかけては、江合川沿いの丘陵上に日光山古墳群(7・22・23)が築造され、6～7世紀に3つの支群を合わせて円墳・方墳39基が確認されている。さらに北西側の江合川に沿った段丘斜面には、7世紀～8世紀前半頃の数百基からなる川北横穴墓群(25)がある。大吉山瓦窯跡の北側～東側の丘陵には、7世紀後葉～8世紀前半頃を中心に築造された塚原古墳群(34)が18基確認されている。その西側に隣接する新谷地北遺跡(16)では、古代の土坑墓が100基ほど見つかり、8世紀前半～10世紀前半頃までの長期にわたり墓域とされていたことが分かっている。

集落としては、大吉山瓦窯跡から南東側約1.0～2.3kmに広がる自然堤防に立地する灰塚遺跡(11)や南小林遺跡(12)で、7世紀後半～末にかけて規模の大きな集落が営まれる。これらの遺跡では関東系土師器が多く出土しており、関東からの移民が一定数を占めていたことがうかがえる。

8世紀には城柵・官衙が出現する。南小林遺跡では8世紀初頭頃に官衙の倉庫院とみられる大型掘立柱建物群が分布し、火災で焼失し短期間で廃絶したことが知られている。また、大吉山瓦窯跡から沢を隔てて南側の丘陵上に、小寺遺跡(4)と杉ノ下遺跡(5)が分布する(第3図)。小寺遺跡では平成4年に農道改良工事に伴う発掘調査で、古代の築地塀2列、整地層3枚、掘立柱建物2棟、竪穴建物5棟などを検出した(古川市教委1995)。築地塀のうち新しいものは9世紀代と考えられ、櫓状建物を伴う。竪穴建物には8世紀前半頃のものがあり、床面から「下」のへら書きのある丸瓦が出土している。杉ノ下遺跡では平成元年に水田改良工事に伴う確認調査が実施され、8世紀後半頃の竪穴建物、土器焼成遺構の可能性のある土坑などが検出された(古川市教委2003)。また、平成12年にはほ場整備に伴う発掘調査が行われ、8世紀後半～9世紀前半頃の総柱の掘立柱建物を検出しており、瓦葺きであった可能性が指摘される(古川市教委2003)。小寺遺跡で確認された築地塀は、周辺にも土塁状の高まりとして残存しており、杉ノ下遺跡の北部まで及ぶことが確認できる(第3図)。これらの調査成果から、小寺・杉ノ下遺跡は古代の城柵官衙遺跡である可能性が指摘される。

大吉山瓦窯跡から、南西に約2.5kmのところ国史跡・名生館官衙遺跡(50)、東に約2.4kmのところ国史跡・宮沢遺跡(47)がある。名生館官衙遺跡は大崎地方で最も早い段階で成立した官衙と考えられ、8世紀初頭には瓦葺きの政庁正殿が築かれている。この時期に丹取郡衙が置かれ、8世紀前半には玉造郡衙に変わったと推定されている。宮沢遺跡は8～9世紀の大規模な城柵と考えら

れ、築地・土塁・材木堀等によって区画された外郭と内郭に分かれ、外郭には櫓状建物も確認されているほか、内部では掘立柱建物や竪穴建物が見つかった。

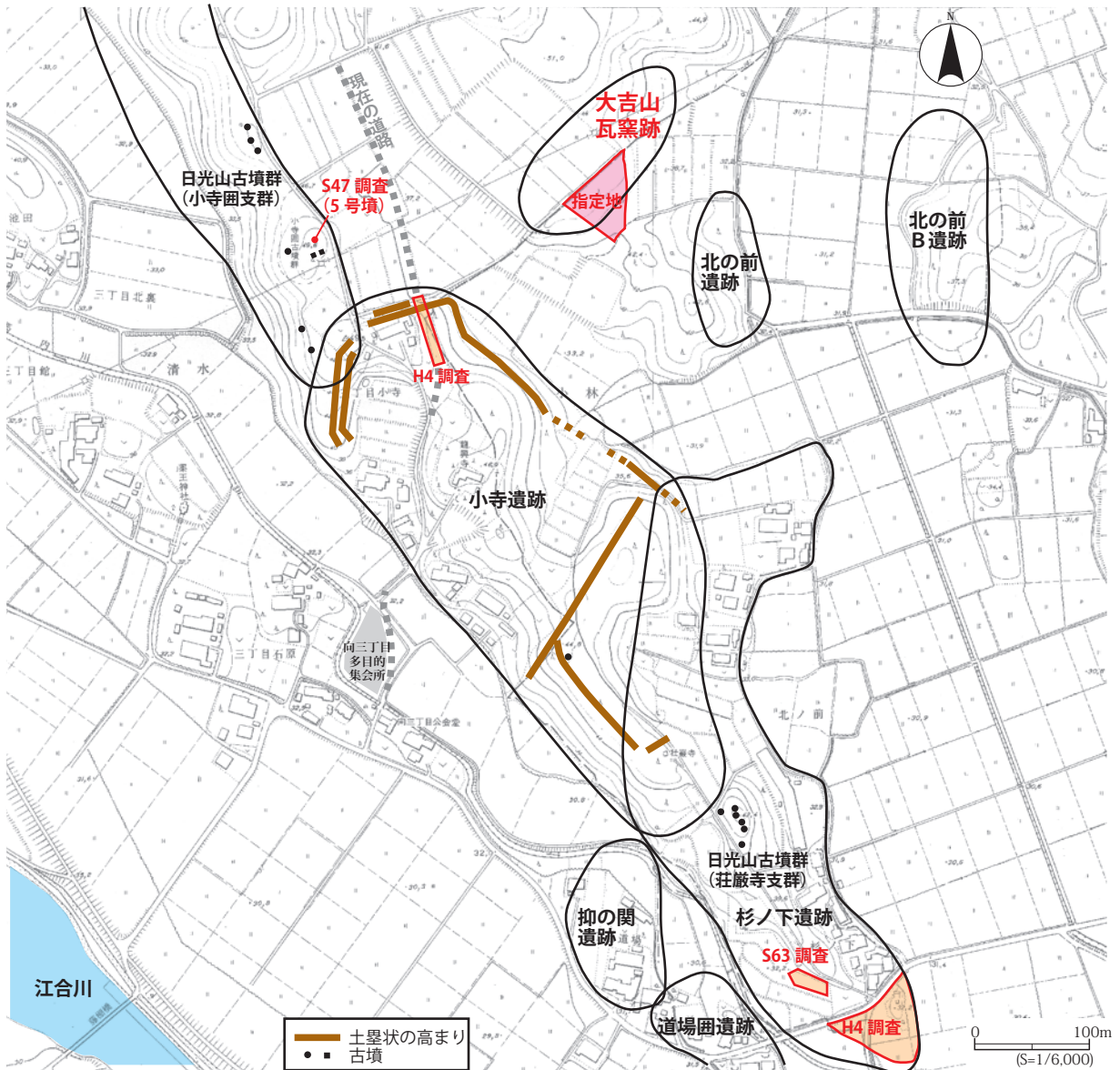


国土地理院発行の『電子地形図 25000』を使用し、『宮城県遺跡地図情報』を合成して作成した（令和3年12月時点）。

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	27046	大古山瓦窯跡	窯跡	奈良
2	27071	北の前遺跡	散布地・窯跡?	縄文・古代
3	27209	北の前B遺跡	散布地・窯跡?	縄文・古代
4	27186	小寺遺跡	官衙?	古代
5	27045	杉ノ下遺跡	散布地・官衙	古代
6	27020	小林杉の下窯跡	窯跡	平安
7	27059	日光山古墳群 (荘厳寺支群)	円墳	古墳
8	27021	抑の関遺跡	散布地	平安
9	27085	道場遺跡	散布地	古代
10	27058	抑の池遺跡	散布地	古代
11	27134	灰塚遺跡	散布地・集落	縄文・弥生・古代・ 中世
12	27070	南小林遺跡	散布地・集落・ 官衙・墓	古代・近世
13	27217	天神前遺跡	集落・古墳	古墳前・古代
14	27032	小林一本杉遺跡	散布地	弥生
15	27057	新谷地遺跡	散布地	旧石器・弥生・古代
16	27202	新谷地北遺跡	古墳・集落	古代
17	27154	浦越東遺跡	散布地	弥生
18	27155	浦越北遺跡	散布地	弥生
19	27143	浦越遺跡	散布地	縄文晩・古代
20	27089	小寺北遺跡	散布地	縄文・弥生
21	27105	三丁目城跡	城館	中世
22	27060	日光山古墳群 (小寺囲支群)	方墳・円墳	古墳
23	27072	日光山古墳群 (成田支群)	円墳・方墳	古墳
24	35104	松森古墳群	方墳(?)円墳(?)	古墳(?)
25	35035	川北横穴墓群	横穴墓群	古墳後
26	27145	成田A遺跡	散布地	縄文早・前・古代
27	27159	成田B遺跡	散布地	縄文

No.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
28	35145	松森南遺跡	散布地	縄文早・前・晩・ 弥生
29	35234	ごぶく沢遺跡	散布地	縄文早・前・奈良
30	27030	大谷地遺跡	散布地	縄文早
30	27033	馬場壇A遺跡	散布地・円墳	縄文早・前・晩・ 弥生・古墳
31	27067	北馬場壇遺跡	散布地	旧石器・縄文早・晩・ 弥生・古墳
32	27008	塚原A遺跡	散布地	縄文晩・弥生
33	27174	塚原B遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・ 平安
34	27012	塚原古墳群	円墳	古墳後
35	27084	西館遺跡	散布地	縄文・弥生・古代
36	27210	西館B遺跡	散布地	古代
37	27211	西館C遺跡	散布地	古代
38	27212	西館D遺跡	散布地	古代
39	27095	内林古墳群	古墳	古墳後・奈良
40	27016	新田町遺跡	散布地	弥生・古墳
41	27056	下田遺跡	散布地	古代
42	27098	宮沢城跡	城館	中世・近世
43	27137	上谷遺跡	散布地	弥生・古代
44	27138	宇南遺跡	散布地	奈良・平安
45	27055	庚壇遺跡	散布地	古代
46	27172	新庚壇遺跡	散布地	縄文・古代
47	27053	宮沢遺跡	散布地・官衙・ 城館・墓	縄文・弥生・奈良・ 平安・中世
	27157	長者原E遺跡	散布地	古代
48	27061	宮田天神遺跡	散布地	古代
49	35184	大下遺跡	散布地	古代
50	27018	名生館官衙遺跡	散布地・集落・ 古墳・官衙・ 城館・屋敷・墓	旧石器後・弥生・ 古墳・古代・中世・ 近世

第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第3図 大吉山瓦窯跡周辺の地形と遺跡分布

古川市都市計画図（平成2年測量）に古川市教委1995第2図、同2003第88図などを合成して作成した。



第4図 大吉山瓦窯跡指定当時の地形図（昭和50年頃測量、原図500分の1）

2. 大吉山瓦窯跡の発見

大吉山瓦窯跡は、昭和 47 年頃に開田に伴う農道建設工事が行われた際に、切土した法面に窯跡が露出したことで発見された^(註1)。出土した軒丸瓦が多賀城跡から出土する瓦と同型（『図録編』軒丸瓦 129）であったことなどから、多賀城第 I 期の窯の 1 つであることが明らかになり、その重要性から昭和 51 年 3 月 31 日付け文部省告示第 40 号をもって国の史跡に指定された。指定に伴い測量図が作成され（第 4 図）、昭和 52 年度の国庫補助事業により、指定範囲全域 2184.44m² が公有地化された。

昭和 54 年に当時の古川市教育委員会が発行した『史跡大吉山瓦窯跡保存管理計画』（古川市教委 1979）によると、「北西から南東へのびる丘陵上の東側斜面に 5 基ほど存在」し、「農道ののり面に窯跡 1 基の煙道部が切断されたことにより発見された」としている。

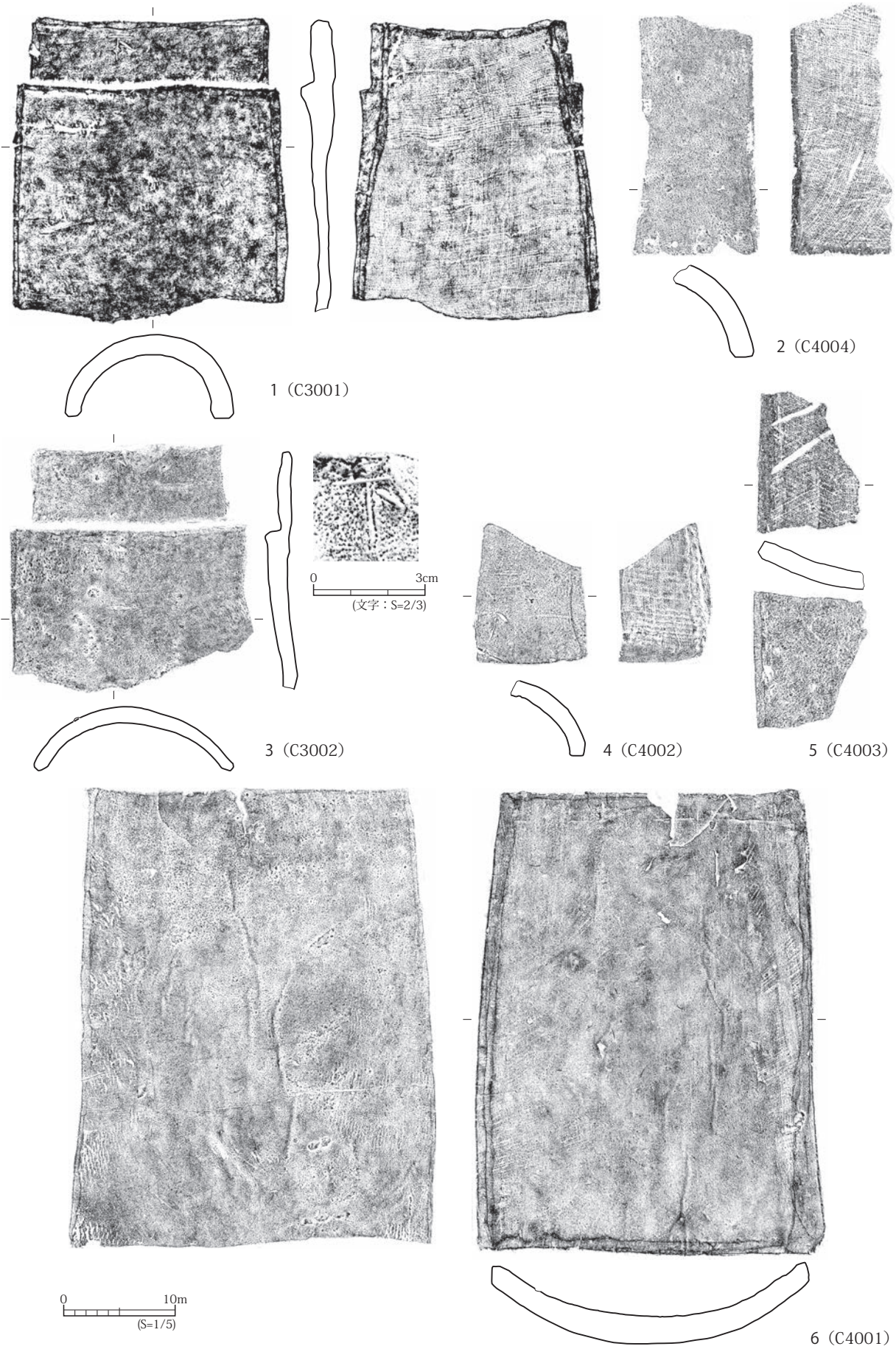
発見当時の資料とされる瓦は、現在大崎市教育委員会で保管しており、内訳は丸瓦 4 点、平瓦 2 点、軒丸瓦 3 点、鬼板 2 点である（第 5・6 図 1～11、第 3 表）。このうち、第 5 図 4・5 には「46.3」の注記があり、昭和 47 年の窯跡発見より前の採集資料の可能性がある^(註2)。ここでは、便宜的に多賀城跡の分類（『本文編』）に基づいて記述する。

丸瓦は 4 点ある。1・3 は、玉縁がある有段の形態で、粘土紐巻き作りの丸瓦 II B 類である。凸面の一部に成形時の縄叩き目を残すことから、II B 類の中でも a タイプに該当する。玉縁の中央付近には「下」とヘラ書きされている。2・4 は有段・無段の形態が分からないが、形態が分かるものと同様に凹面に布目、凸面にロクロナデ調整痕を残すことから、II 類に該当するとみられる。そのうち 2 は、凸面に丸瓦を立て並べて焼成した痕跡が見られ、焼台として転用されたものと考えられる。

平瓦は 2 点ある。6 はほぼ完形資料で、凹面に成形時の模骨痕とみられる痕跡が確認できることから、桶巻き作りと考えられる。凹凸面とも最終的にナデ調整が施されており、凸面の一部に成形時の縄叩き目が見られることから、I A 類 a タイプに該当する。5 は側端部の破片資料で、凹面には模骨痕と布目が残り、凸面は縄叩き後ナデ調整を施している。破片資料のため推定の域を出ないが、I B 類の平瓦に該当する可能性がある。

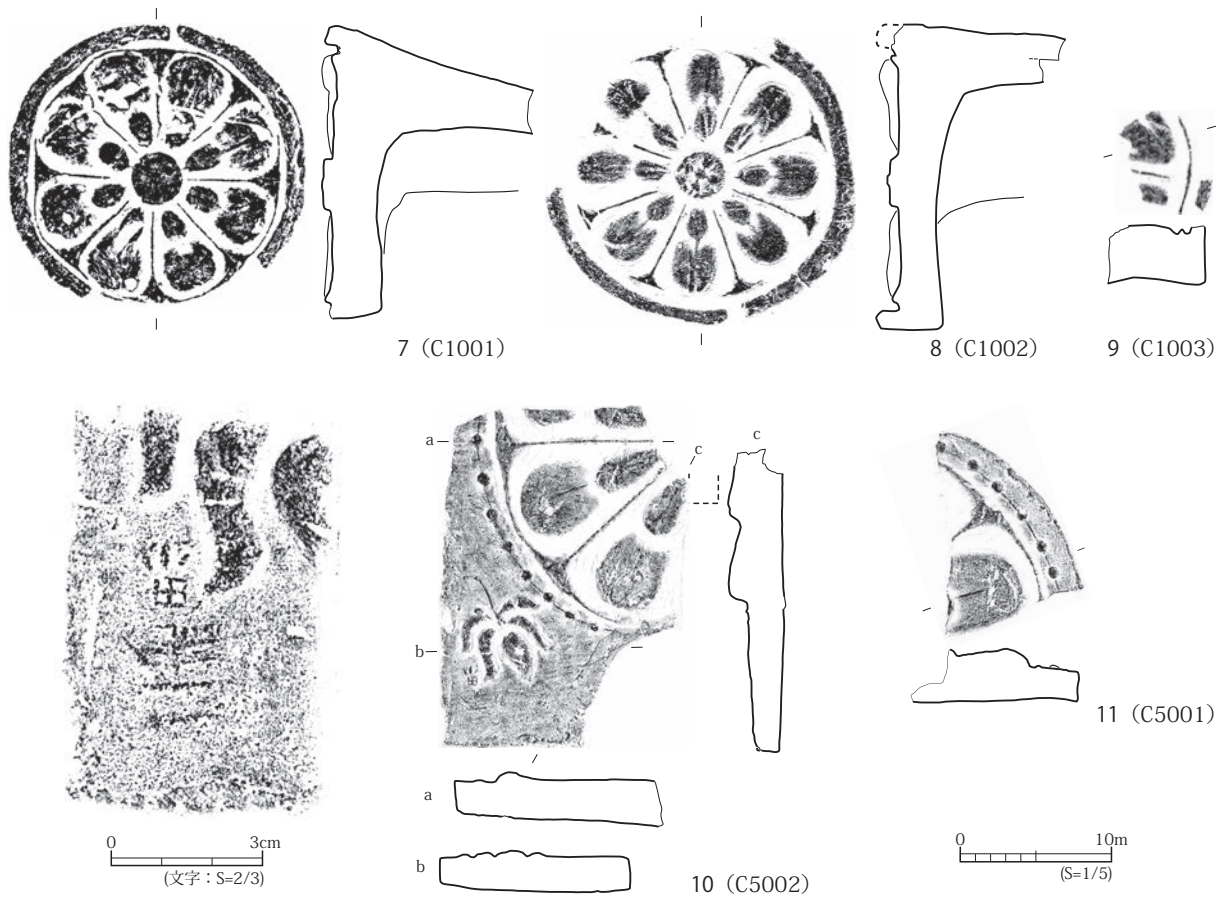
軒丸瓦は、重弁蓮花文の型番 129 が 2 点（7・8）と型番非該当のもの 1 点（9）である。8 の破損部分では、丸瓦が瓦当部に 3 cm 程度挿し込まれている様子が確認できる。丸瓦挿入後は、瓦当裏面と丸瓦が接する部分の内外に粘土を付加しており、いわゆる印籠つぎという接合方法をとることがわかる。丸瓦端部には接合する際のヘラキザミは見られない。伴う丸瓦は、凹面に布目、凸面にロクロナデ調整が見られることから II 類に該当する。9 は破片資料で全体の文様構成は不明だが、蓮弁は扁平で、間弁は 129 型式で見られるような銀杏形の端部がなく隆線のみで表現されている点が特徴的である。

鬼板は 2 点ある。左下 1/4 が残存する 10 は、8 葉重弁蓮花文を中央に据え、その周囲に連珠文をめぐらし、脚部に蓮花の蕾を配する文様構成と考えられる。加えて、11 の周縁はアーチ状の形態をしており、10 と 11 の背面はともにケズリ調整が施されていることから、いずれも 950 C 型式鬼板であると考えられる。10 の脚部には範による陽出文字「小田建万呂」が記されていたとみられ、「万」



第5図 昭和40年代採集遺物(1)丸瓦・平瓦

の1画目より下はケズリ調整により判読できない。なお、背面には丸瓦と平瓦を立て並べて焼成したとみられる痕跡があり、焼台として転用されたものと考えられる（写真図版1-10）。



第6図 昭和40年代採集遺物（2）軒丸瓦・鬼板

図	種類	残存	特徴	分類	登録	写真図版
1	丸瓦	2/3	玉縁長5.6cm、厚さ2.0cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、玉縁中央やや左にヘラ書き「下」、凹面：粘土紐積痕・布目、側端・小口：ケズリ、色調：にぶい赤褐色（10YR5/4）	II B-a	C3001	—
2	丸瓦	1/3	厚さ1.3cm、凸面：縄叩き？→ロクロナデ、凹面：布目（合せ目痕あり）、側端・小口：ケズリ、色調：黄灰色（2.5Y6/1）	II	C4004	1
3	丸瓦	1/2	玉縁長6.8cm、厚さ1.2cm、凸面：縄叩き→ナデ、玉縁中央ヘラ書き「下」、凹面：布目、0.4～1.3cmの付着物あり（粘土塊？）、側端・小口：ケズリ、色調：褐灰色（10YR5/1）	II B-a	C3002	1
4	丸瓦	2/3	厚さ1.8cm、凸面：縄叩き？→ロクロナデ、焼台として使用した痕跡あり、凹面：布目、側端・小口：ケズリ、色調：凸面褐灰色（10YR5/1）、凹面にぶい橙色（7.5YR7/4）	II	C4002	—
5	平瓦	側端部片	厚さ1.6cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→横骨痕・布目、側端：ケズリ、色調：にぶい赤褐色（5YR5/3）	I B ?	C4003	—
6	平瓦	ほぼ完形	長さ41.5cm、広端幅30.1cm、狭端幅26.7cm、厚さ2.0cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→横骨痕・布目→ナデ、狭端部に自然釉付着、側端・小口：ケズリ、色調：黄灰色（2.5Y5/1）	I A-a	C4001	1
7	軒丸瓦	瓦当ほぼ完形	重弁蓮花文、【瓦当】直径19.4cm、厚さ3.6cm、側面：ケズリ、裏面：ケズリ、ナデ、【丸瓦】厚さ1.4cm、凸面：ロクロナデ？、凹面：布目、側端：ケズリ、瓦当接合時に凸面・凹面に粘土を付加。粘土付加後凸面はケズリ、凹面はナデ調整。色調：灰黄色（2.5Y7/2）	129	C1001	1
8	軒丸瓦	瓦当ほぼ完形	重弁蓮花文、【瓦当】直径20.6cm、厚さ3.6cm、側面：ケズリ、裏面：ケズリ、ナデ、【丸瓦】厚さ1.2cm、凸面：ロクロナデ、凹面：布目、側端：ケズリ、接合方法：瓦当裏面に溝を掘って丸瓦を挿し込み、凸面・凹面に粘土を付加。凸面はケズリ、凹面はナデ。色調：にぶい橙色（5YR7/3）	129	C1002	1
9	軒丸瓦	瓦当片	蓮花文、【瓦当】側面ケズリ、裏面：ナデ、色調：灰褐色（7.5YR5/2）	—	C1003	1
10	鬼板	左下1/4	厚さ3.6cm、外面：重弁蓮花文、外側に連珠文、脚部に蓮花の蕾と「小田建万呂カ」の陽出文字、周縁ケズリ、背面・側端・下端・挟り部：ケズリ、色調：オリーブ灰色（2.5GY5/1）、背面に焼台として使用した痕跡あり	950C	C5002	1
11	鬼板	右上端部片	厚さ3.5cm、外面：重弁蓮花文、外側に蓮花文、周縁ケズリ、背面・側端ケズリ、色調：灰色（5Y4/1）	950C	C5001	1

表3 昭和40年代採集遺物観察表



2 (C4004)



3 (C3002)



3「下」
(約 2/3)



6 (C4001)



7 (C1001)



8 (C1002)



9 (C1003)



10「小田建万」
(約 2/3)



10 (C5002)



11 (C5001)

6は 1/6、それ以外は 1/5

写真図版 1 昭和 40 年代採集遺物

写真登録番号 Y2658 ~ 2676

Ⅲ. 大吉山瓦窯跡第1次調査

1. 調査の目的

大吉山瓦窯跡は発見以来およそ50年が経とうとしているが、これまでに発掘調査が実施されていなかったため、具体的な内容は不明のままとなっていた。今次計画では、窯の分布や規模・構造、工房等の遺構分布、生産された瓦の内容などを、複数年かけて明らかにすることとした。第1次調査となる今年度は、まず窯・灰原、工房等の遺構の数や分布を確認することを主な目的とした。

2. 調査の方法と経過

〔調査準備〕調査対象地は指定地全体（約2,180m²）で、窯が発見された農道から南東方向へ下る斜面である。現況は広葉樹の雑木林となっており、笹などの下草が密生している状況であった。調査に先立つ令和3年5月には、下草の刈払いと測量基準点の設置を業者委託により実施した。

調査にあたっては地元行政区などと協議の上、向三丁目多目的集会所（第3図）に仮設の調査事務所を設置し、駐車場として使用させていただくこととした。6月1日から宮城県会計年度任用職員5名を作業員として任用し、調査を開始した。

〔地形測量と遺構調査〕下草刈払い後に現地を再確認したところ、対象地北西部（斜面上半部）を中心に窯跡とみられる窪地を複数確認したことから、遺構の残存状況が良く、それが現地形に反映されていると想定した。そこで、現地形の測量を先行して実施し、完了した部分から窯の分布を推定しながら試掘トレンチ（T1～21）を設定した（第8図）。一方、対象地の南東部は緩やかな斜面で、明確な窪地などは確認されなかったため、今回は部分的なテストピット（TP1～5）による層確認にとどめた。表土の掘り下げはすべて人力で行い、遺構の平面検出と一部掘り下げを行った結果、窯8基（SR1～8）、灰原3か所（灰原A～C）などの遺構を確認した。

〔記録の作成〕平面図は、トータルステーション（ソキア製CX-107F）で測量した点を縮尺1/20または1/100で図面用紙に落とし、手書きで作成した。測量点の座標数値は外部記録媒体にすべて保存した。断面図は遣り方測量により、縮尺1/20で、図面用紙に手書きで作成した。遺構写真はデジタルカメラ（Nikon製D7000：1,690万画素）を用い、画像の保存形式はRAWとJPEGとして、色調補正のためにグレーカードを写しこんだものも撮影した。空中写真撮影にはドローン（DJI製PHANTOM3 PROFESSIONAL：1,200万画素）を使用し、6月30日と8月3日に遺跡周辺を撮影した。



調査前の状況 Y2421
(右側の農道法面で窯が発見された)



地形測量 Y2546



トレンチ掘削 Y2551

〔調査成果の公開〕7月20～22日には、調査成果の現地公開(22日は地区住民対象)を実施し、合計30名の来跡があった。また、7月30日には大崎市文化財保護委員に調査成果を説明した。12月11日には「令和4年度宮城県遺跡調査成果発表会(於涌谷公民館)」で調査の概要を紙上報告した。



現地公開

Y2566

〔埋め戻しと撤収〕7月中旬以降、精査が完了したトレンチから

人力で埋め戻しを開始し、8月4日には埋め戻しがすべて完了した。8月6日に器材を撤収し、調査を終了した。屋外での調査日数は実働33日である。

〔遺構の整理〕トレンチ平面図・断面図はドローソフト(Adobe Illustrator)を用いてトレースを行い、土層注記表と合わせて図を作成した。遺構写真は類似するカットの中から登録するものを選出し、画像編集ソフト(Adobe Photoshop)を用いてRAWデータの色調等を補正した後、TIFF形式で保存した。登録番号は、遺構写真にY2420～2529、空中写真にY2530～2540、その他の写真(調査の様子など)にY2541～2579を付した。本書に掲載した写真の登録番号は右下に記した。

〔遺物の整理〕出土した遺物は瓦・須恵器・土師器・窯壁・石製品等で、整理用平箱に換算して20箱分である。これらは水洗後、接合を行いながら調書を作成し、集計表にまとめた(表4・5・7)。このうち、残存状況のよい遺物や特徴的な調整が施された遺物88点を抽出して登録番号R1～R88を付した。そのうち主要な遺物41点について実測図・拓本を作成した。トレースはドローソフト(Adobe Illustrator)を用いて行い、観察表と合わせて遺物図版を作成した。遺物写真はデジタルカメラ(Nikon製D7000:1690万画素)を用いて撮影し、登録番号Y2580～Y2686を付した。

3. 測量調査の成果

前述したとおり、調査対象地の南東斜面のうち、窯が発見された農道に近い北西部において、窪地や平坦面など、窯の掘削・操業に伴うとみられる地形が観察された。指定当時の地形図(第4図)では、これらの微地形が十分に反映されていないこと、また、平成2年の都市計画図(第3図)や、今回新たに設置した基準点(第7図)と比較すると、標高値が3m前後異なる(第4図の方が高い)ことが判明した。そこで、指定地内については今回新たに現地地形図を作成することとした。

調査に先立って、株式会社イビソクに委託し、調査対象地周辺に4級相当の測量基準点を3点(第7図K2～4)設置した。ただし、現場は立木が障害となって、この基準点だけでは全体を見通すことができないため、調査開始後にトータルステーションを用いて仮設の基準点7点(K5～K11)を設置した。これらの基準点にトータルステーションを設置し、おおむね1m程度の間隔で標高点の測量を行った。併せて、指定地と隣接する農道や畦畔などの位置も測量した。それでも十分な測量を行えなかった範囲があり、今後、立木伐採などを行った後に追加・修正することとしたい。

測量した点の座標数値を元に、遺構実測支援ソフトウェア「遺構くん」(大崎市教委所有)を用いて、20cm単位の等高線を描画した(第7図下)。指定地内の標高は39.0～47.5mで、このうち標高43～47m付近に、広い平坦面や細長い窪地が複数あることが明示できた。

【基準点の設置と標高点の測定】

■ 基準点 (4 級相当)

K 2 : X=-152818.705 Y=7668.679 Z=44.679

K 3 : X=-152846.367 Y=7673.490 Z=43.964

K 4 : X=-152835.485 Y=7657.530 Z=46.597

(※このほか、離れた位置に K 0 と K 1 を打設)

● 仮設基準点

K 5 : X=-152839.742 Y=7667.529 Z=45.166

K 6 : X=-152855.787 Y=7635.361 Z=47.191

K 7 : X=-152847.696 Y=7656.737 Z=46.251

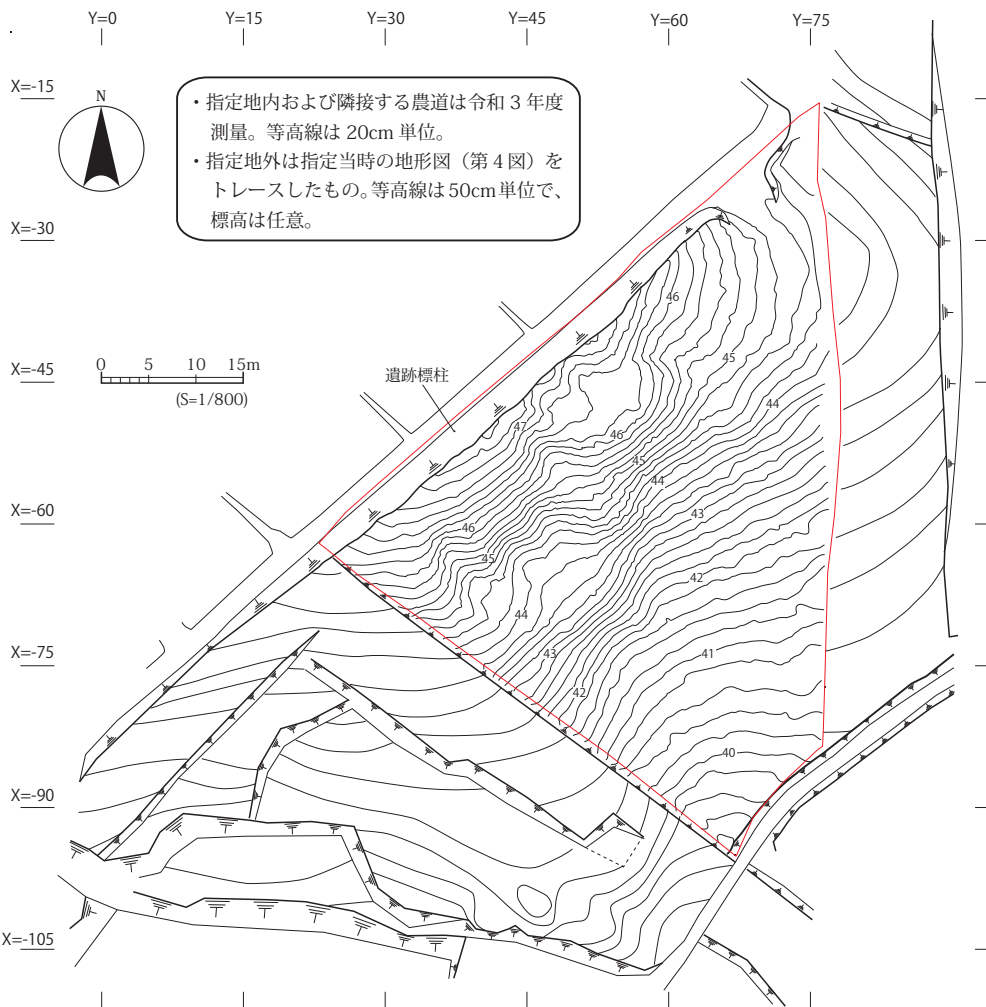
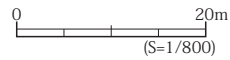
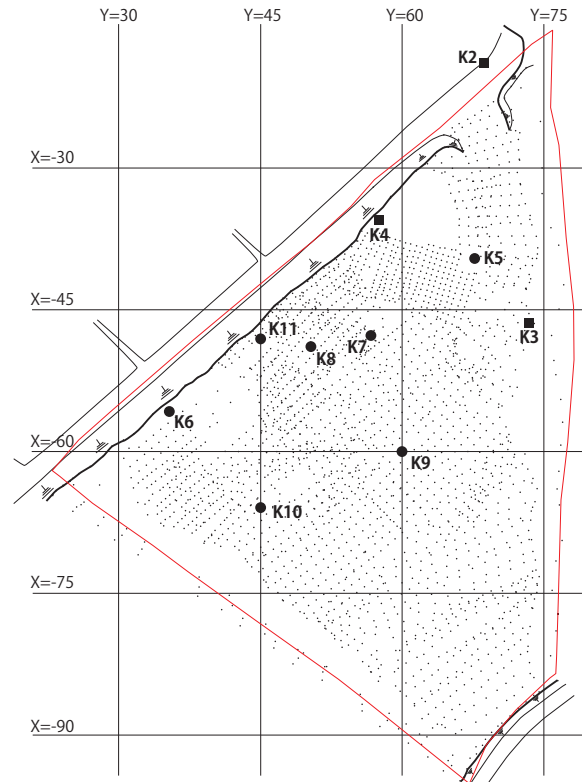
K 8 : X=-152848.871 Y=7650.369 Z=46.472

K 9 : X=-152860.000 Y=7660.000 Z=43.242

K10 : X=-152866.012 Y=7645.020 Z=44.074

K11 : X=-152848.017 Y=7645.997 Z=47.245

※グリッドは X=-152800, Y=7600 を原点として表記



第7図 基準点の設置と地形図の作成

4. 調査区の設定と基本層序

地形図の作成に加えて、現地地形で観察される窪地の形状や、平坦面と急斜面の境などを測量し、縮尺 1/100 で図面作成した（第 8 図赤線）。これらの情報に基づき、窯や灰原とみられる部分を中心に、トレンチを設定し、遺構の検出状況に応じて適宜追加・拡張した（第 8 図青線、T 1～T 21）。また、対象地南東部の緩やかな斜面には、約 1 m 四方のテストピット 5 か所（T P 1～5）を設定した。

これらの調査区では、以下のような基本層序を確認した。

I 層：暗褐色（10YR3/3）シルト。表土。腐植土で、しまりなく柔らかい。厚さ 20～60cm。

II 層：黒色（10YR2/1）シルト。古代以前の旧表土。均質。ややしまりあり。

III 層：灰白色火山灰。10 世紀前葉に降下した十和田 a 火山灰（To-a）とみられる堆積層。

IV 層：暗褐色（10YR3/4）シルト。地山ブロックを含む。

V 層：黒色（10YR2/1）シルト。均質。しまりなく柔らかい。厚さは T P 1 で最大約 50cm。

VI 層：黄褐色（10YR5/1）シルト。地山。地点によって、粘土質、砂質、礫混じりなどの相違がある。

多くの窯は調査対象地の西半部において、I 層直下に分布する VI 層上面で検出した。II～IV 層は窯廃絶後の窪地に自然堆積した層で、窯の上部を共通して覆っているため、これらも基本層に含めた。V 層は対象地東半部を中心に分布しており、窯より古い堆積層である。II 層と V 層は平面では区別が困難だが、II 層には瓦が含まれており、T 1 や T 5 の断面においても、しまりの有無等から V 層→II 層の新旧関係を確認した（第 12 図）。

5. 発見した遺構

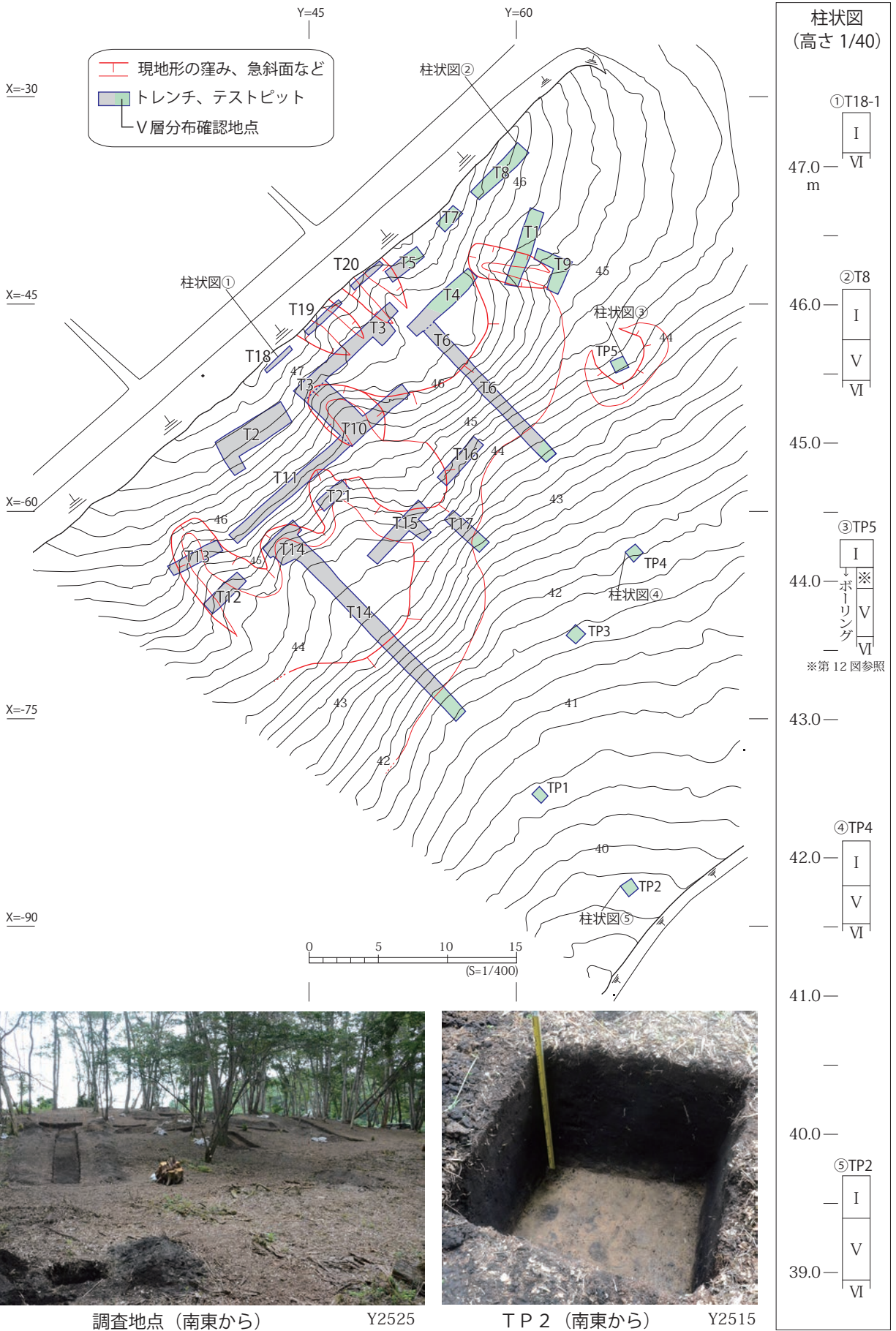
窯 8 基（SR1～8）、灰原 3 か所（A～C）を検出した（第 9 図）。このほか、T 2 で灰白色火山灰を含む堆積土を検出し、一部断ち割りなどを行ったが、風倒木痕の可能性が高いと判断し、今回は図示のみにとどめる（第 13・15 図）。

（1）窯

窯はいずれも斜面の等高線に直交する方向（北西-南東方向）に造られ、南東側に焚口、北西側に煙道を持ち、地山をトンネル状に掘り込んだ地下式窖窯と考えられる。基本的に窯の一部を平面検出した段階にとどまるため、以下の記述で、規模については II～IV 層の検出範囲を計測した。また、出土遺物はいずれも検出面や堆積層上部出土であることから、「6. 出土遺物」の項でまとめて記述する。

【SR 1】（第 10・12 図）

T 3～T 6 および T 20 の V・VI 層上面（標高 46.1～46.5 m）で検出した。T 20 では S R 2（T19）の約 2.4 m 北東側にある。検出面では中央部に広く II 層、その外側に IV 層が分布する。T 3 で S R 2 と重複するが、堆積土は IV 層で共通しており、新旧関係は確認されない。T 5 では IV 層上部まで掘り下げたところ、II 層と IV 層の境に部分的に III 層（灰白色火山灰）の堆積を確認した（第 12 図断面 a）。現地表面は T 3 から南東側では平坦で、北西側ではやや窪んでおり、前者は前庭部付近、後者は天井の崩落した窯体部分と推定した。窯体の過半は農道工事により失われた可能性が高い。検出した長さは 7.4 m、窯体部分の幅は T 20 で 1.8～2.2 m である。



第8図 調査区の設定と基本層序

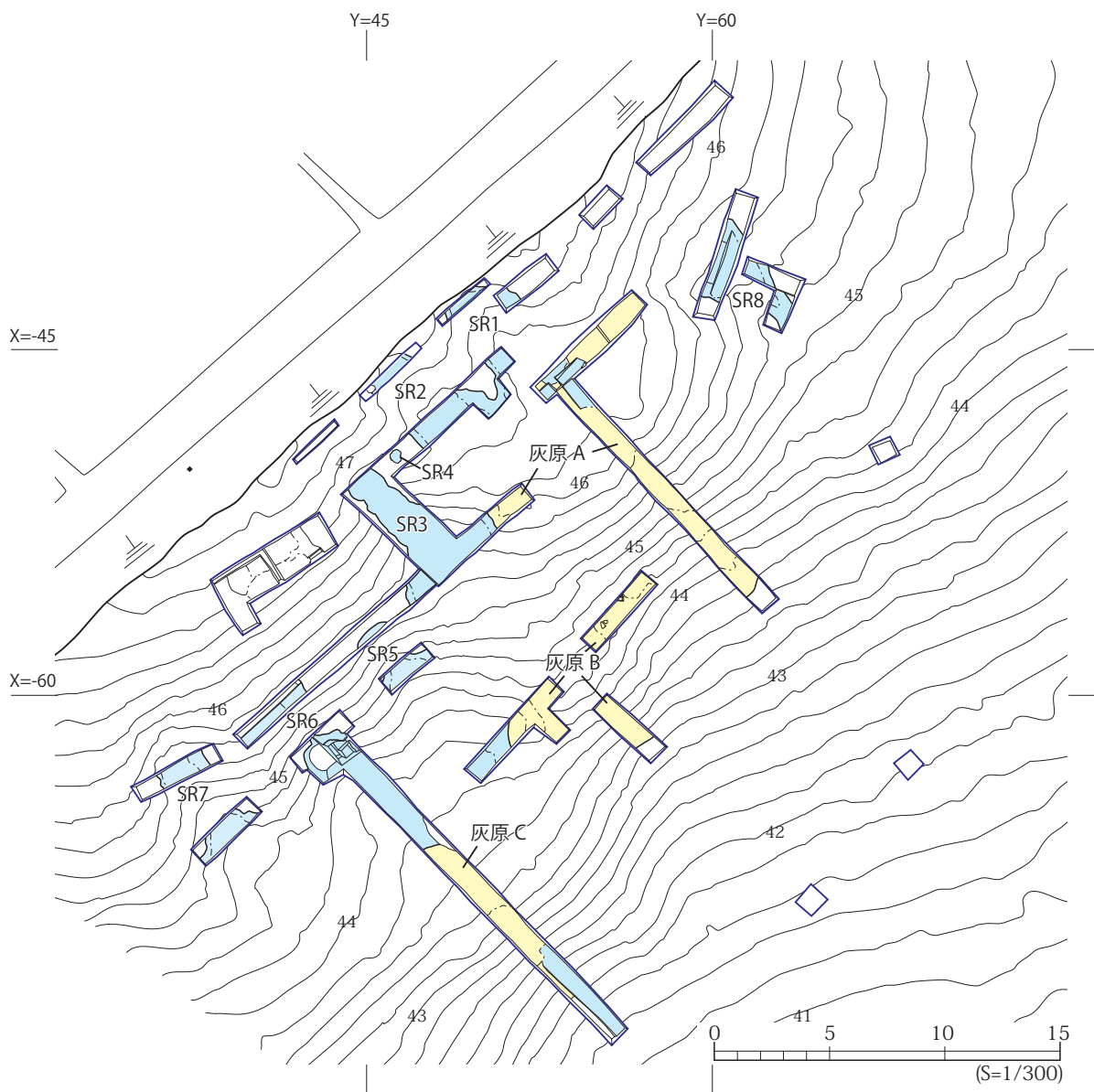
【SR2】(第10図)

T3・T19のVI層上面(標高46.2～46.7m)で検出した。T19ではSR1(T20)の約2.4m南西側にある。また、T3ではSR4煙出しから約0.8m北東側にある。検出面では中央部に広くII層、その外側にIV層が分布する。T3でSR1と重複するが、堆積土はIV層で共通しており、新旧関係は確認されない。現地表面はT3では平坦で、T19ではやや窪んでおり、T3は前庭部付近、T19は天井の崩落した窯体部分と推定した。窯体の過半は農道工事により失われた可能性が高い。検出した長さは4.6m、幅は窯体部分で2.0～2.4m、前庭部で2.8～3.6mである。

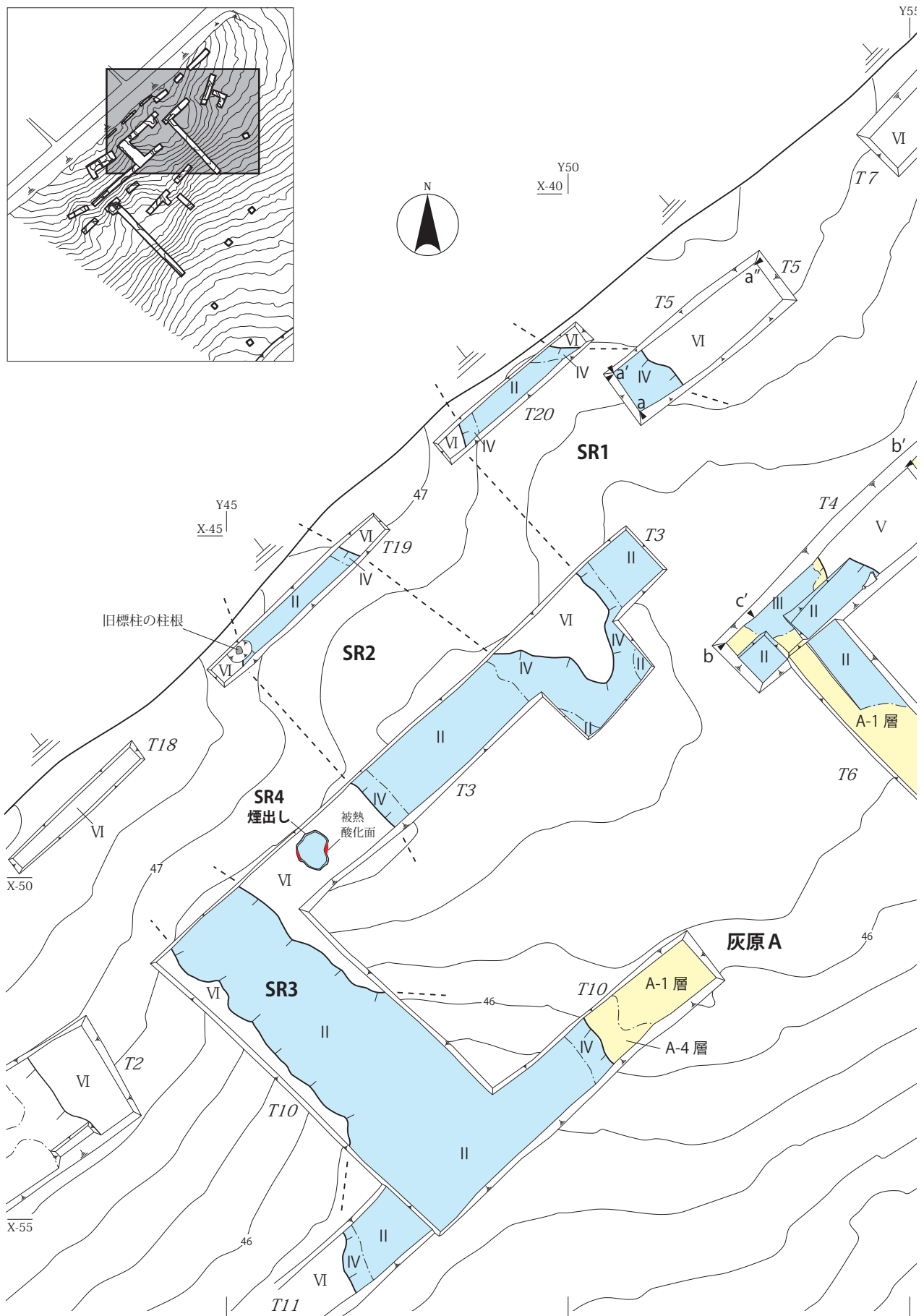
なお、T19で確認した柱根は、過去の写真と比較すると遺跡標柱が立っていたところで、平成18年度の文化財保護管理指導カードで倒れていることが報告されている(現在は別位置に建て替え)。

【SR3】(第10図)

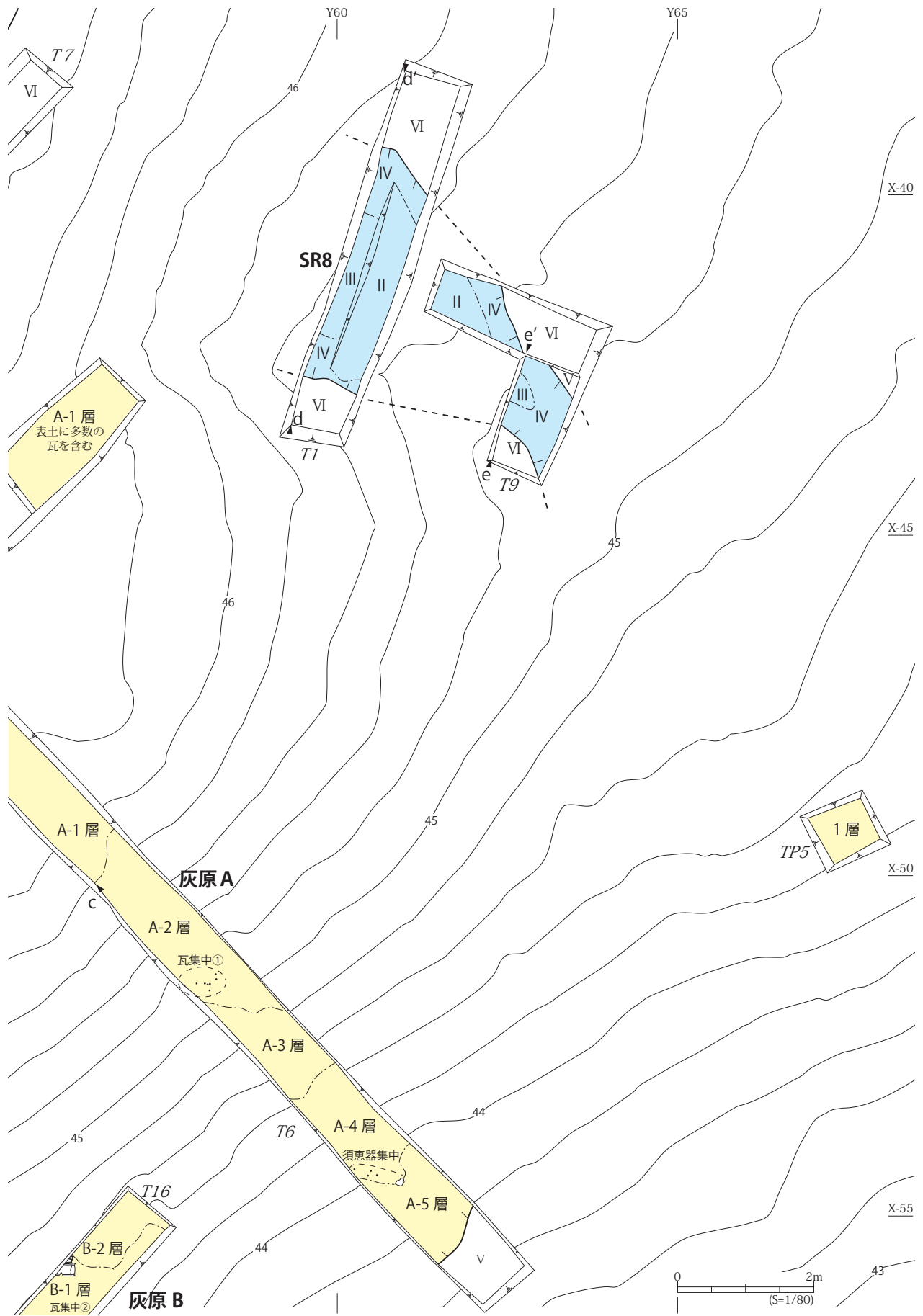
T3・T10・T11のVI層上面(標高45.2～46.5m)で検出した。T3ではSR4煙出しの約0.8m南西側にあり、T11ではSR6の約1.2m北東側にある。検出面の堆積土は、全体的にII層



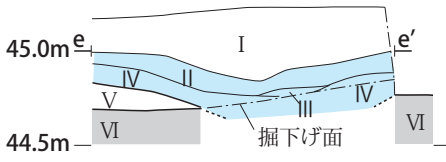
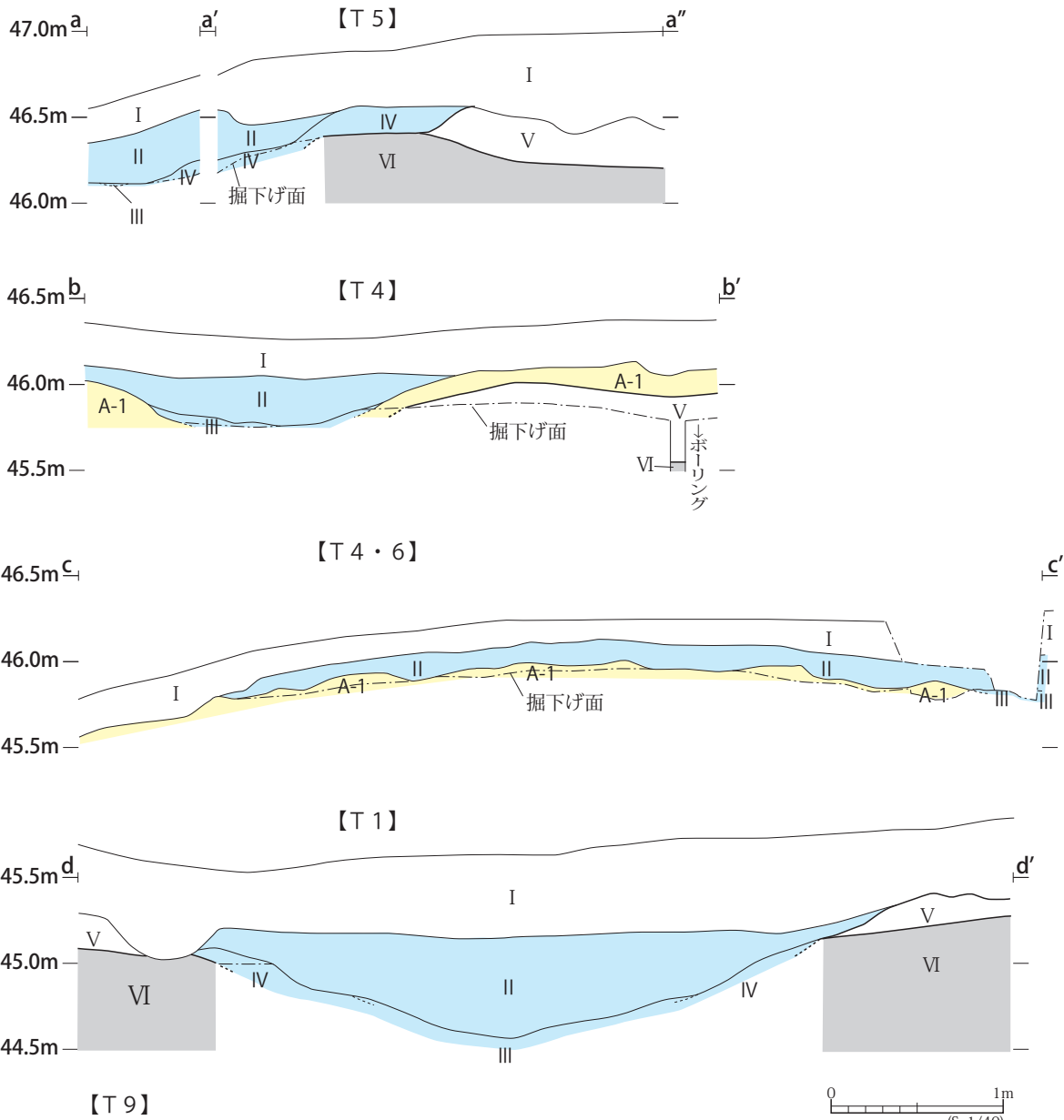
第9図 遺構配置図



第10図 遺構平面図(1) SR1~4、灰原A



第11図 遺構平面図(2) SR8、灰原 A



灰原A堆積層 (A-1層以外は平面図のみ)

層	土色・土性	含有物など	備考
A-1	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭・焼土粒を多く含む	
A-2	黒色 (10YR2/1) シルト	炭・焼土塊を多く含む	
A-3	黒褐色 (10YR2/3) シルト	炭・焼土粒・地山塊を含む	
A-4	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト	地山塊を多く、炭を含む	窯掘削排土か
A-5	黒褐色 (10YR2/2) シルト	炭・焼土粒を含む	

TP5 堆積層

層	土色・土性	含有物など	備考
1	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルト	にぶい黄褐色シルト塊を含む	窯掘削排土か

第 12 図 遺構断面図 (1)



① T3 SR1・2 検出 (北西から) Y2435



② T3 SR2～4 検出 (南西から) Y2437



③ T10 SR3 検出 (南から) Y2457



⑤ T6 灰原 A 検出 (北西から) Y2478



④ T6 斜面 灰原 A 検出 (北から) Y2477



⑥ T6 灰原 A 須恵器集中 (北東から) Y2516



⑦ T1・T9 SR8 検出 (東から) Y2442

写真図版2 遺構写真(1)

が分布し、T 10 と T 11 ではその外側にIV層を確認した。IV層はT 10 東部で灰原A -4 層と重複しており、これより新しい。S R 3は現地表面においても大きな窪地として観察され、天井の崩落した窯体～前庭部付近とみられる。検出した長さは5.9 m、窯体部分の幅は1.3～1.8 m、前庭部の幅は4.7～5.0 mである。方向は座標北に対して西へ46°振れる。窯体はさらに北西方向に続いているが、延長上に設定したT 18では検出されなかった。

【S R 4】(第10図)

T 3のVI層上面(標高46.5 m)で壁の被熱したピットを検出し、窯の煙出しと推定した。S R 2の南西側、S R 3の北東側にあり、それぞれ約0.8 m離れている。窯体は未確認である。

ピットは直径0.4～0.6 mの不整な円形を呈し、地山壁の一部に被熱酸化面が認められる。検出面の堆積土はにぶい黄褐色(10YR5/4)シルトで、炭・焼土を多く含み、瓦が出土する。

【S R 5】(第13図)

T 11・T 15・T 21のVI層上面(標高43.6～45.3 m)で検出した。T 11ではS R 3の約1.2 m南西側にあり、T 21ではS R 6(T 14)の約2.7 m北東側にある。検出面では、T 21の中央に広くII層、その外側にIV層が分布する。それらの続きとみられる層をT 15南西部でも確認し、IV層は灰原B -2層と重複しており、これより新しい。T 11では南東壁付近にIV層を検出したのみで、その周囲は地山VI層であった。現地表面ではT 21付近がやや窪んだ状態で観察され、南東に向けて大きく開く平面形であることから、この部分が焚口付近で、北西側斜面上方に窯体が伸び、南東側のT 15付近の平坦面は前庭部と推定した。T 11から北西側は窯体の天井が崩れずに残っている可能性がある。検出した長さは8.0 m、幅は焚口付近が1.5 m、前庭部は2.0～2.8 mである。

【S R 6】(第13・15図)

T 14のVI層上面(標高43.5～44.7 m)で検出した。T 14ではS R 5(T 21)の約2.7 m南西側にあり、S R 7(T 12)の約2.8 m北東側にある。検出面では、T 14北西部で広くII層が分布し、北西端にIV層が分布する。現地表面ではT 14北西端付近がやや窪んだ状態で観察され、S R 5と同様にこの部分が焚口付近で、南東側平坦面に前庭部、北西側斜面上方に窯体が伸びると推定した。検出した長さは7.0 m、幅は0.3～2.2 mである。

T 14北西端部において、北東側半分を長さ1.8 m、深さ約1.3 mにわたって掘り下げたところ(第15図断面h)、II～IV層の下には地山由来の崩落土と自然流入土が互層状に堆積し(1層)、さらに下層には炭・焼土粒を含む黒色土(2層)が堆積する。安全のためそれ以上の掘り下げは行わなかったが、ボーリング調査で標高42.7 m付近にまとまった炭の層、その下に被熱酸化面を確認した。また、1層は標高43.4～43.9 m付近で、北西側の地山VI層の下に潜っていく状況を確認し(第15図断面h・i)、北西側のT 11では、II～IV層の堆積を確認したが、その下部は地山VI層であったことから、T 14より北西側では窯体の天井が崩れずに残っていると考えられる。

【S R 7】(第13図)

T 12・T 13のVI層上面(標高44.3～45.3 m)で検出した。T 12ではS R 6(T 14)の約2.8 m南西側にある。検出面では、中央に広くII層、その外側にIV層が分布する。現地表面では全体

が大きな窪地として観察され、T 13が天井の崩落した窯体部分、T 12が焚口～前庭部付近と推定した。検出した長さは4.1 m、幅は窯体部で2.2～2.3 m、焚口～前庭部付近で1.8～3.2 mである。

【SR 8】(第11・12図)

T 1・T 9のV・VI層上面(標高44.6～45.3 m)で検出した。検出面の堆積土は中央部に広くII層、その外側にIV層が分布する。II層を部分的に掘り下げたところ、IV層との境にIII層(灰白色火山灰)の堆積を確認した(第12図断面d・e)。T 1が前庭部付近、T 9はそこから斜面下方へ向けて延びる排水溝と推定した。検出した長さは4.0 mで、幅は前庭部付近で3.1～3.6 m、溝部分で約1.0 mである。窯体は未確認で、斜面上方に設定したT 7・T 8では検出されなかった。

なお、現地表面ではSR 8付近に東西方向に細長い窪地(第9図)が観察されたが、SR 8の検出位置とは一致せず、直接の関係はないとみられる。また、南東側斜面下方(標高43.6～44.6 m付近)ではわずかなマウンド状の盛り上がりが見られ、TP 5を設定して調査したところ、表土直下に地山ブロック主体の層(第12図柱状図1層)を検出した。位置的に、SR 8の掘削排土が堆積した層の可能性はある。ボーリング調査では厚さ15cm程度で、その下部にはV層・VI層を確認した。

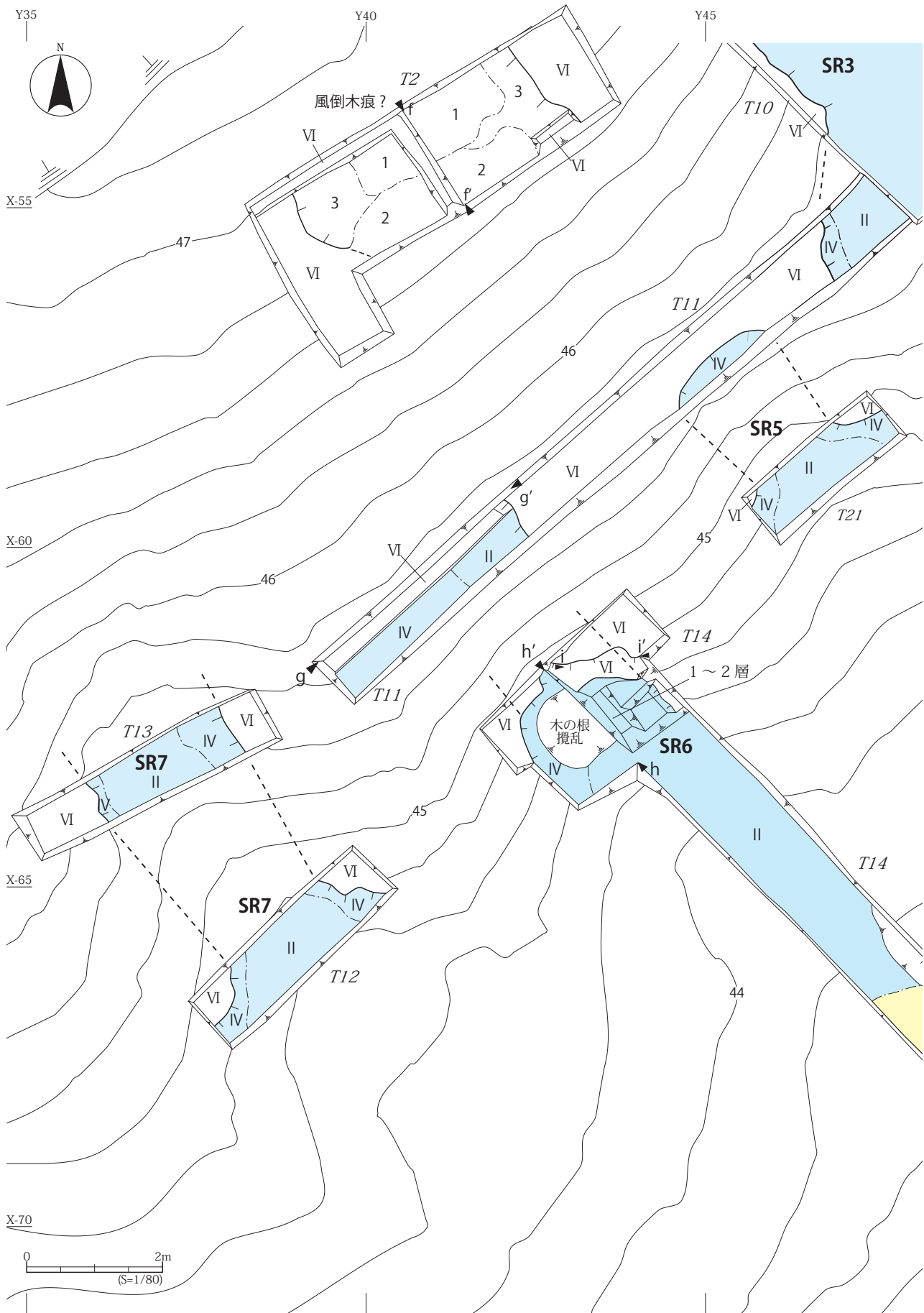
(2) 灰原

現地形で平坦面と急斜面、マウンド状の盛り上がりとして観察された部分において、炭・焼土を含む層や地山ブロックを多く含む層、瓦集中部分などを検出した。これらは窯の掘削・操業に伴う堆積層の可能性があり、ここでは便宜的に「灰原」と呼称する。現地形からみて3か所に分かれて把握されることから、T 4・T 6・T 10で検出したものを灰原A、T 15～17で検出したものを灰原B、T 14で検出したものを灰原Cとして報告する。ただし、AとB、BとCは重複しており、厳密な範囲や新旧関係は今のところ明らかでない。

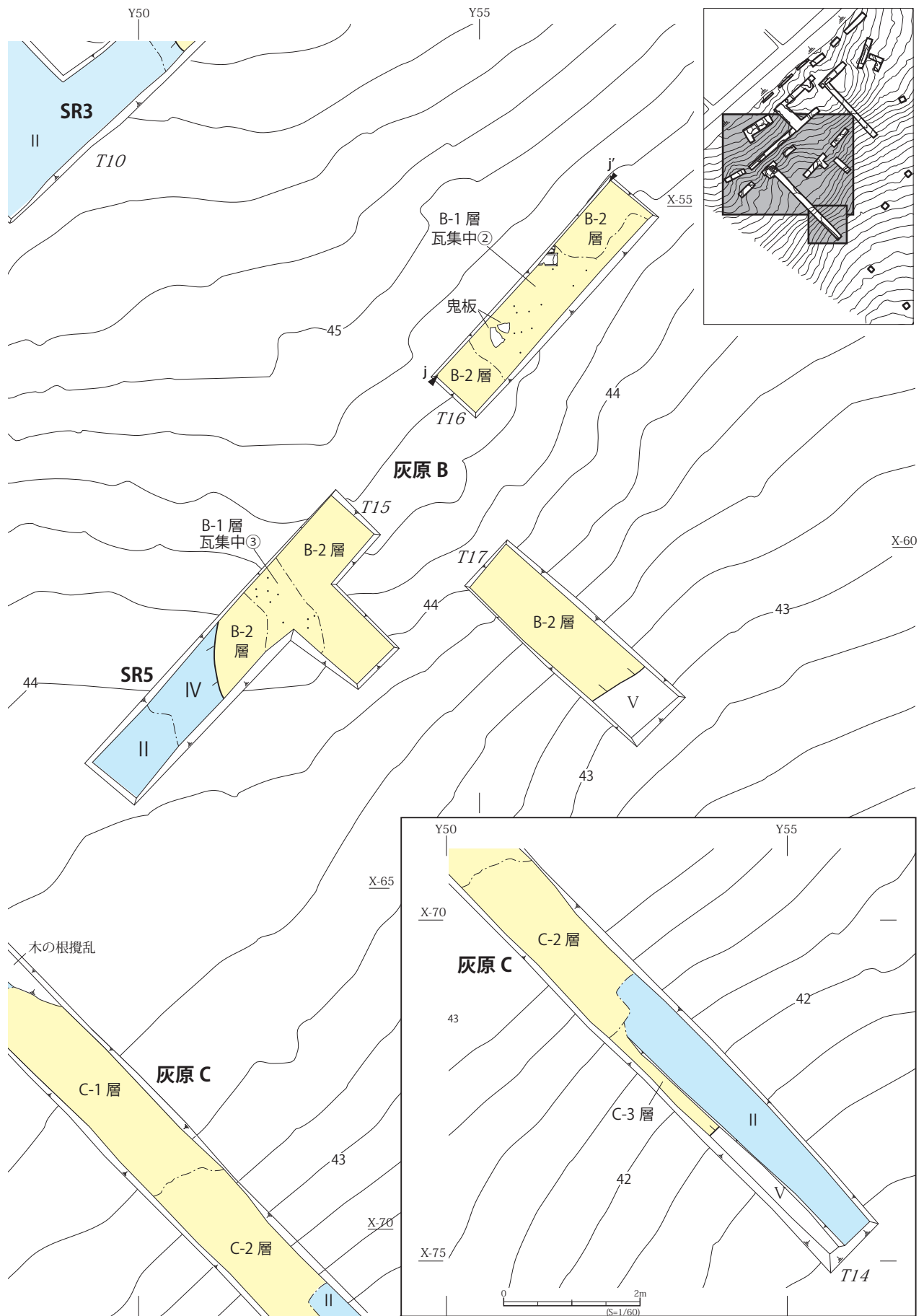
【灰原A】(第10～12図)

SR 1・2の南東側斜面下方へ広がる。現地表面では標高46.0～46.4 mがほぼ平坦な面として観察され、そこから標高44.0 m付近までが急傾斜となる。検出面でもほぼこの地形に沿って、標高43.4～46.0 mにかけて炭・焼土・瓦等を含む堆積層(A - 1～5層)を検出した。調査結果と現地形から、灰原Aの範囲は北西-南東方向に約17 m、北東-南西方向に約13 mと推定している。

A - 1～3層は平坦面から斜面上部にかけて分布し、黒色または黒褐色のシルトで、含まれる炭・焼土・地山ブロックの大きさや量によって分層した。このうち、A - 1層は平坦面に広く分布し、T 6北西部ではSR 1に向けてやや下がっており、その上部にII～III層が堆積する(第12図断面c)。T 4北東部ではA - 1層は薄いですが、表土から多量の瓦が出土しており、A - 1層に由来する可能性がある。斜面上部に分布するA - 2層には瓦集中①があり、丸瓦(第16図7)などがまとまって出土した。A - 4層は斜面中腹にあり、にぶい黄褐色シルトで、地山ブロックを多く含むことから、掘削排土の可能性はある。須恵器甕の破片(第21図36)がまとまって出土した。A - 5層は斜面最下部に分布する黒褐色シルトで、炭・焼土粒を含み、瓦も少量出土する。直下には均質なV層が分布する。



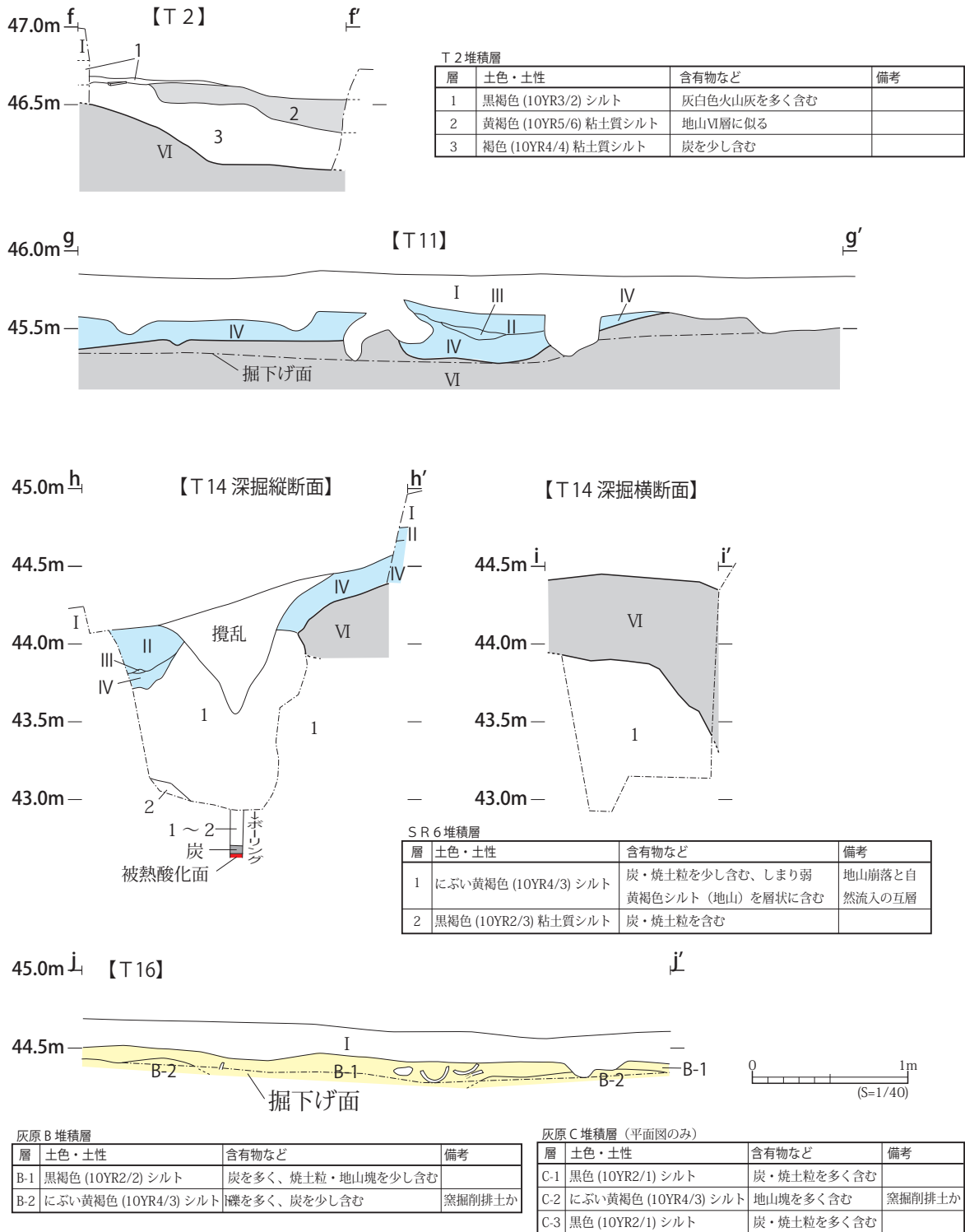
第13図 遺構平面図(3) SR5~7



第14図 遺構平面図(4) 灰原B・C

【灰原B】（第 13・15 図）

S R 3の南東側斜面下方へ広がる。現地形では標高 45.0 m付近を境に、北西側の S R 3は窪んでおり、南東側の灰原Bは標高 43.0 m付近までマウンド状に盛り上がっている。検出面では、このマウンド状の地形に合わせるように、標高 42.9 ~ 44.5 mにかけて地山ブロックを多く含む土（B - 2層）の分布を確認し、その上部の B - 1層で瓦集中2か所（②③）を確認した。調査結果と現地地形から、灰原Bの範囲は北西 - 南東方向に約 7 m、北東 - 南西方向に約 10 mと推定している。



第 15 図 遺構断面図（2）



① SR5～7 検出（北東から） Y2522



② T12・T13 SR7 検出（南東から） Y2519



③ T14 SR6 深掘り断面（東から） Y2472



④ T14 灰原C 検出（南東から） Y2529



⑤ T14 斜面 灰原C 検出（北から） Y2503



⑥ T15 瓦集中③（南東から） Y2487



⑦ T16 瓦集中②（南東から） Y2481

写真図版3 遺構写真（2）

B - 1層は黒褐色シルトで、炭を多く含む。瓦集中は北西 - 南東方向に帯状に2か所確認した。T 16の瓦集中②では、丸瓦（第16図10）、平瓦（第19図18）、鬼板（第20図34・35）などが出土した。T 15の瓦集中③では丸瓦（第16図8）、平瓦（第18図16）などが出土した。B - 2層はにぶい黄褐色のシルトで、掘削排土と考えられ、瓦は出土していない。T 15の南西部でⅣ層（SR 5）に覆われ、T 17の南東端では、直下に均質なⅤ層が分布する。なお、T 16北東端に分布するB - 2層は、灰原A - 4層とも類似する。

【灰原C】（第13・14図）

SR 6～8の斜面下方に広がる。現地形では標高43.4～44.2m付近がほぼ平坦な面として観察され、そこから標高41.6m付近までが急傾斜となる。検出面では、この地形に沿うように標高41.5～43.5mにかけて、炭や焼土を含む層、窯の掘削排土とみられる層を確認した。調査結果と現地形から、灰原Cの範囲は北西 - 南東方向に約13m、北東 - 南西方向に15m以上と推定している。

平坦面に分布するC - 1層は黒色のシルトで、炭・焼土粒を多く含む。SR 7の焚口に向けて下がっていくとみられ、その上部をⅡ層が覆っている。斜面上部に分布するC - 2層はにぶい黄褐色のシルトで、地山ブロックを多く含んでおり、掘削排土の可能性もある。斜面下部のC - 3層は黒色のシルトで、炭・焼土粒を多く含む。上部をⅡ層に覆われており、直下には均質なⅤ層が分布する。

6. 出土遺物

第1次調査で出土した遺物には、瓦・窯壁・須恵器・土師器・縄文土器・石製品がある。調査区・層位ごとに、瓦の種類別点数一覧を表4に、瓦と窯壁の重量一覧を表5に、土器・石製品の点数一覧を表7にまとめた。以下、遺物の種類別に、概要と出土の様相について記述する。なお、掲載遺物は第16図1～第21図41まで通し番号を付しており、写真図版4～6の番号もこれに対応する。

（1）瓦

丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、隅切瓦、鬼板が出土しており、丸瓦・平瓦には少数の文字瓦が含まれる。合計点数（接合後）は1,158点、重量は193,220gである。点数・重量ともに平瓦が60～70%を占めており、丸瓦を加えると95%を超える。これらの瓦は概ね多賀城の分類（『本文編』）で捉えられるもので、それに基づいて記述する。

①丸瓦（第16図1～10）

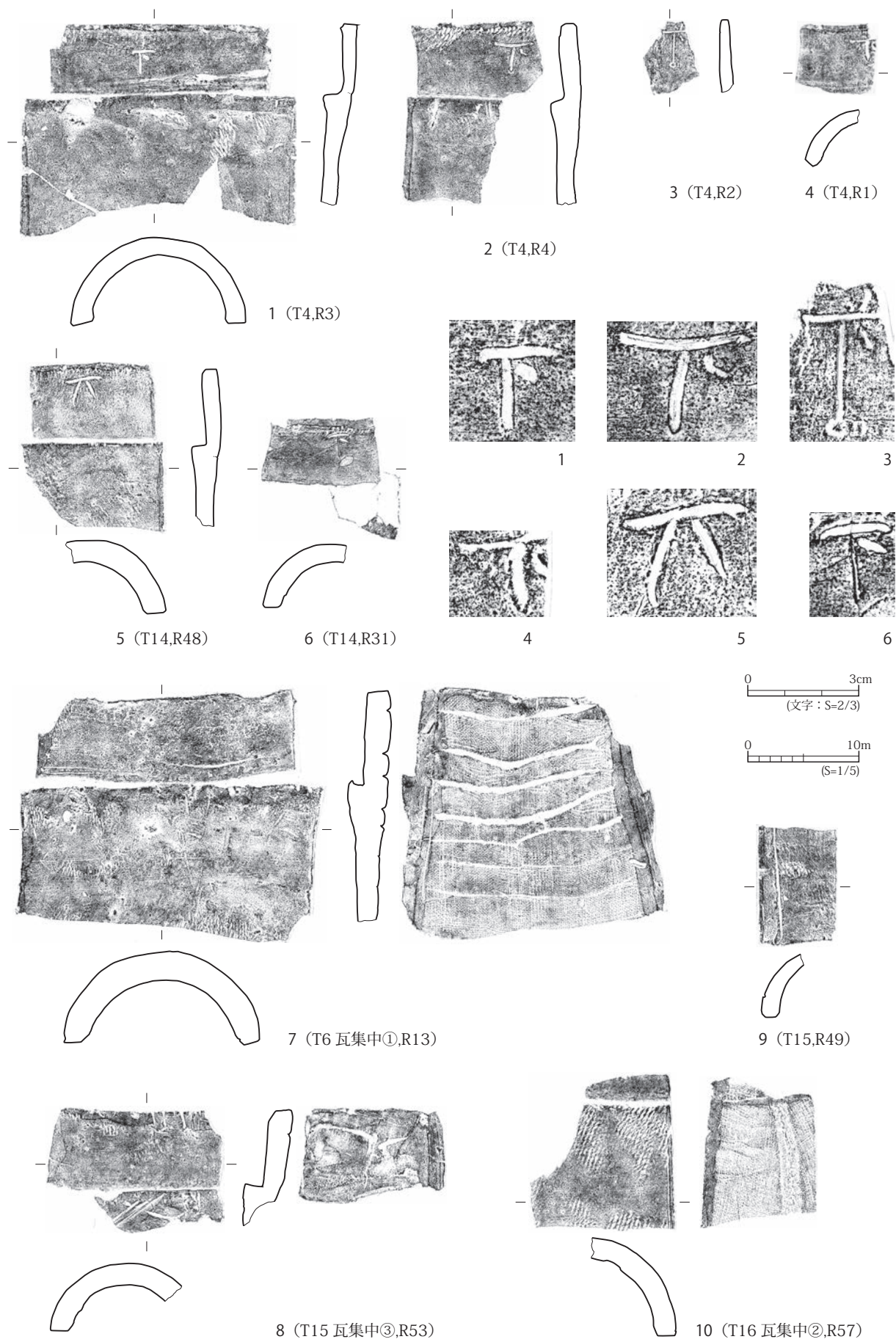
425点（50,820g）出土した。分類の判別できるものではすべて、粘土紐巻き作り～ロクロ調整による丸瓦Ⅱ類である。そのうち、狭端部の残存するものはすべて玉縁を有するⅡB類で、ロクロ調整前の叩き目が確認できるものは、縄叩きのaタイプのみである。粘土紐痕を明瞭に残すもの（7）、凹面の布目をナデ・ケズリによって消しているもの（8）、側端部付近に、円筒型から分割する際の日印とみられる沈線を残すもの（9・10）がある。また、玉縁に「下」のヘラ書きを有するものを9点確認し、文字の残りのよい6点を図示した（1～6）。位置は玉縁のほぼ中央（1・2）、左寄り（4・6）、右寄り（5）がある。やや幅広の平たい線（1・2）と、細く尖った線（3～6）がみられるが、工具の当たり方に起因する可能性もある。文字瓦の出土位置としては、T 4（SR 1～灰原

区	層	丸瓦			平瓦			軒丸	軒平	鬼板	隅切	不明
		II	IIIB	IIBa	不明	IA	IAa					
T1・T9	I層	7	4	4	3	1	3					
	II層	3	1	2	19	3	3	1				
	I層	1	1	1	9	4						
T2	1・3層				2	2						
	I層	9	5	4	1	24	8	6				
T3	SR4煙出し				5							
T4	I層	39	10	11	30	70	52	34			1	
	II層	16			8	29	15	19				
T5	A-1層	2										
	I層	1			4							
T6	I層	24	2	2	10	36	12	17				
	II層	25	3		7	27	3	6			2	
	A-1～5層	2	4			7		1				
T7・T8	A-1層	2			2	2						
	A-2層	2										
	A-3層	2										
	A-4層	3	2		10	2					1	
T10	I層	9	1	2	20	3	6					
	II層	7			1	4		3				
T11	A-1・4層				3							
	I層				4			2	2			
T12	I層	39	4	5	47	31	11			2	3	
	II層	4			7							
	1～2層	3	1		9	2						
T14	C-1～3層	4			1	1	1					
	I層	13	1	2	8	3	3			1		
T15	II層	1										
	瓦集中③	5	1	1	7	2	1					
T16	I層	20	2		17	8	11	2	1	1		
	瓦集中②	10		5	8	4	3			2		
T17	I層	2			4	1			1			
T18	I層	1			3	1						
T21	I層	3										
TP1・4・5	I層				2							
その他	表採・排土	21	3	3	2	17	2	8				
合計		276	42	39	68	409	165	140	7	4	5	2
総計				425			721					
							1,158					

表4 出土瓦点数集計表

区	層	丸瓦			平瓦			軒丸	軒平	鬼板	隅切	不明	蓋壁
		II	IIIB	IIBa	不明	IA	IAa						
T1・T9	I層	910	120	270	120	270	120	80					
	II層	180	310	360	30	5,760	140	30	570				20
	I層	20	230		20	2,140	1,460						
T2	1・3層					990	30						
	I層	490	1,090	570	10	5,790	2,050	160					590
T3	SR4煙出し					1,230							420
T4	I層	4,140	2,550	1,930	780	15,650	12,910	750			300		540
	II層	1,310			370	3,600	6,880	160					390
T5	A-1層	70				690							130
	I層	50											330
T6	I層	3,230	100	400	220	4,500	5,410	240				30	1,000
	II層	2,280	270		160	3,170	430	110					100
	A-1～5層												730
	A-1層						300						
	A-2層	240	5,210			1,870		10					
	A-3層	130				140	370						
T7・T8	A-4層						150						
	I層	170	130			1,990	190		1,890				
T10	I層	680	30	210		3,790	680	110					
	II層					90							300
T11	A-1・4層	290			10	290		50					
	I層					570							
T12	I層					1,060		10	650				
	II層	3,740	600	2,930		7,530	9,100	350		190	170		
T14	I層	310		870		700							
	II層	340	70			1,710	510						
	1～2層	370				70	100	60					
T15	C-1～3層	1,220	90	230		1,330	570	100		140			
	I層	30											
T16	II層	1,280	60	470		2,930	480	430					
	瓦集中③	2,340	160			6,280	1,700	450	190	30	610		
T17	I層	1,090		1,750		3,620	700	100		3,980			
	瓦集中②	200				1,990	1,040	170					
T18	I層	570				550	300						
T21	I層	340					290						
TP1・4・5	I層					560							
その他	表採・排土	1,430	310	540	70	1,950	500	750					10
合計		27,450	11,290	10,260	1,820	82,130	47,220	3,980	1,730	360	2,670	300	30
総計				50,820			135,060						4,890
							193,220						

表5 出土瓦重量集計表



第 16 图 丸瓦

A周辺)とT 14 (SR 6～灰原C周辺)である。

②平瓦 (第 17 図 11～第 19 図 27)

721 点 (135,060g) 出土した。分類が判別できるものは、ほとんどが桶巻き作り後に凹面と凸面をナデ調整した I A 類である。

【I A 類】(11～19) 全体的にナデ調整は粗く、叩き目や布目を残すものが多い。凸面の叩き目が確認できるものはすべて縄叩きの a タイプで、長軸方向に平行するもの (14) と斜行するもの (13・16～18) があり、12 は両方がみられる。凸面に布目を残すもの (11・18) もある。凹面は、横骨痕の窪んだ部分に布目を残すものがほとんどである。凹面縁辺部は、側端部や小口と合せてケズリが施されており、2～3 cm の幅広いケズリもみられる (17)。13 は、凹面側端部寄りに縦位方向に瓦片が融着しており、平瓦を立て並べて焼成した際に、隣接する瓦の側端部が融着したとみられる。19 は凸面にへら書きがあり、丸瓦の例から「下」と推定したが、斜めの線が横方向の線より先に書かれている。

【その他の平瓦】(20～27) I A 類には属しないと判断したが、いずれも破片のため分類が明確でない。20 は凹面のナデが認められず布目を明瞭に残す。21 は逆に凸面のナデが認められず、やや潰れた縄叩きが残る。22 と 23 は凸面に斜格子叩きを施すもので、凹面のナデ調整は明瞭でない。20 は I B 類、21 は I D 類、22 と 23 は I C 類の可能性ある^(註3)。24 は凹面ナデ調整の前に縄叩きを施す^(註4)。25 と 26 は同一個体とみられ、凸面に蓮花状の文様による叩きを施している。26 の凹面には 13 と同様、縦位方向に瓦片が融着する。27 は平瓦を焼台に転用したもので、凸面の剥落部分が床面に接地していたとみられ、凹面には丸瓦片が融着する。

③隅切瓦 (第 20 図 28)

1 点 (300g) 出土した。28 は平瓦の小口を約 65°の鋭角になるように切り落としている。凹面はナデ調整で、凸面は全体に自然釉・窯壁が付着しているため、平瓦としての分類は不明である。

④軒丸瓦 (第 20 図 29～31)

4 点 (360g) 出土した。瓦当面の文様が残るものは 3 点で、いずれも蓮弁の一部である。過去に出土した型番 129 (第 6 図 7・8) と比較すると、29・30 は同型でも矛盾はない。一方、31 は瓦当の復元径が 18.0cm とやや小さく、蓮弁の先端が隅丸形状を呈する点が型番 129 と明らかに異なる。多賀城跡のそのほかの型番資料とも一致しないとみられる。

⑤軒平瓦 (第 20 図 32・33)

5 点 (2,670g) 出土した。瓦当文様が明らかな 2 点は二重弧文 511 である。32 は平瓦 I A 類を使用する 511-a タイプで、顎部は平瓦部と明瞭な段で区画し、横位に直線文 1 本を施した後、長さ 6～7 cm の鋸歯文を左から右へ描き、二等辺三角形とする。沈線の太さは 7～9mm である。33 は瓦当周辺のみだが、凹面にナデが施されていることから、32 と同様に 511-a タイプの可能性もある。顎部は 32 より長く、平瓦部との段はなだらかである。施文順序は 31 と同じで、横位の直線文 1 本と長さ 7～9 cm の鋸歯文で二等辺三角形とする。沈線の太さは 5～8mm である。



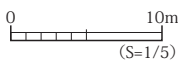
11 (T3,R23)



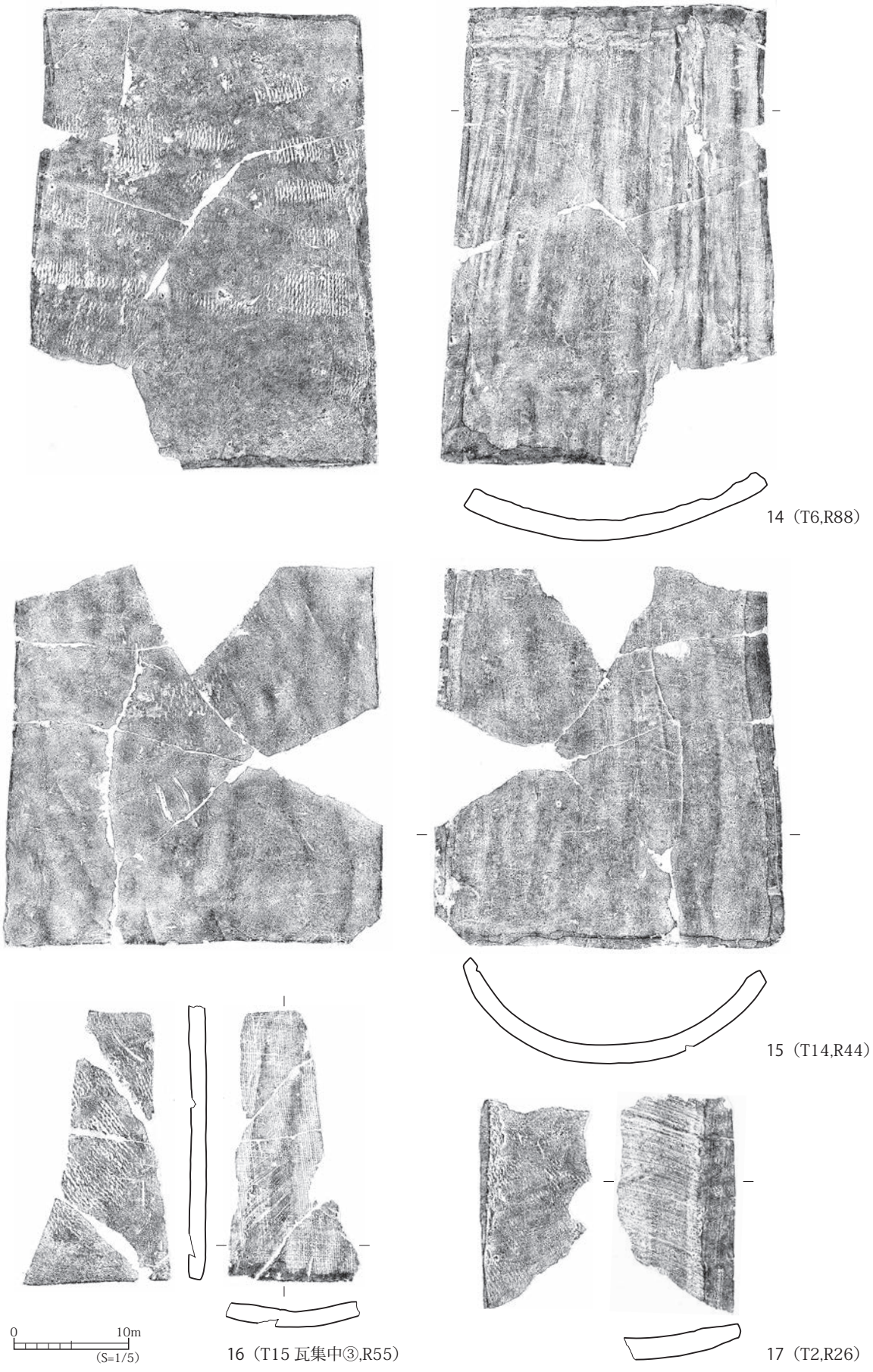
12 (T4,R10)



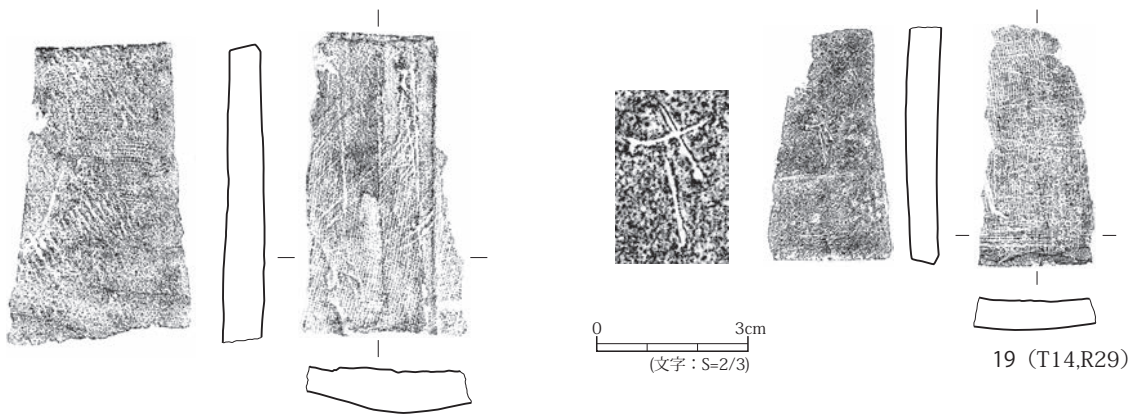
13 (T4,R9)



第17图 平瓦 (1)

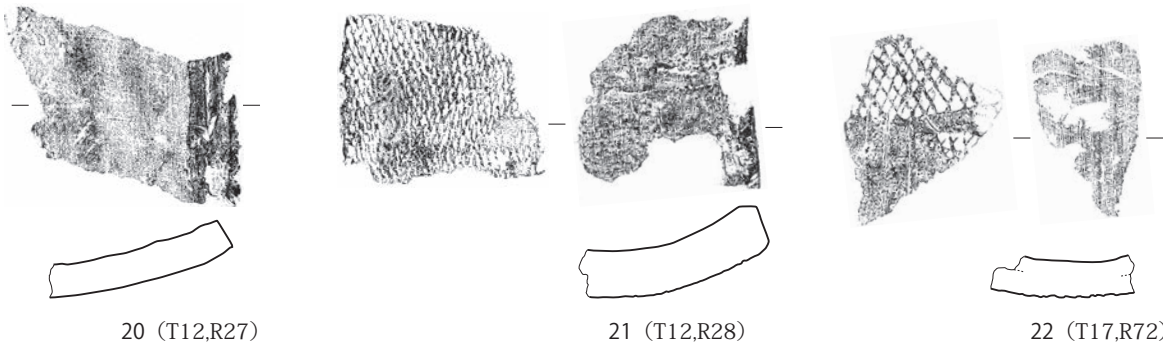


第18图 平瓦(2)



18 (T16 瓦集中②,R61)

19 (T14,R29)



20 (T12,R27)

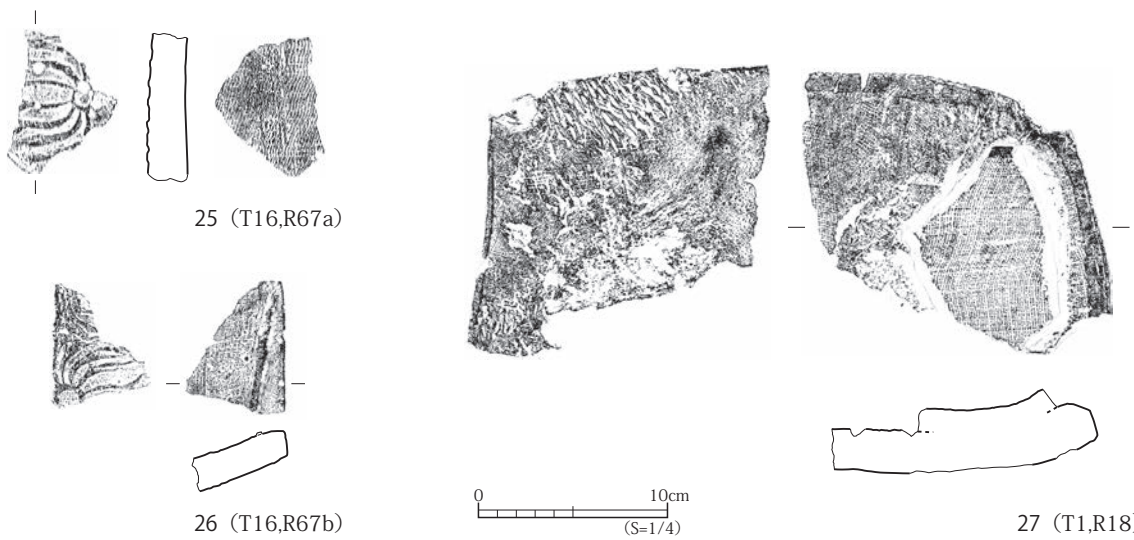
21 (T12,R28)

22 (T17,R72)



23 (T6,R15)

24 (T1,R17)

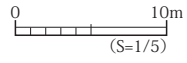
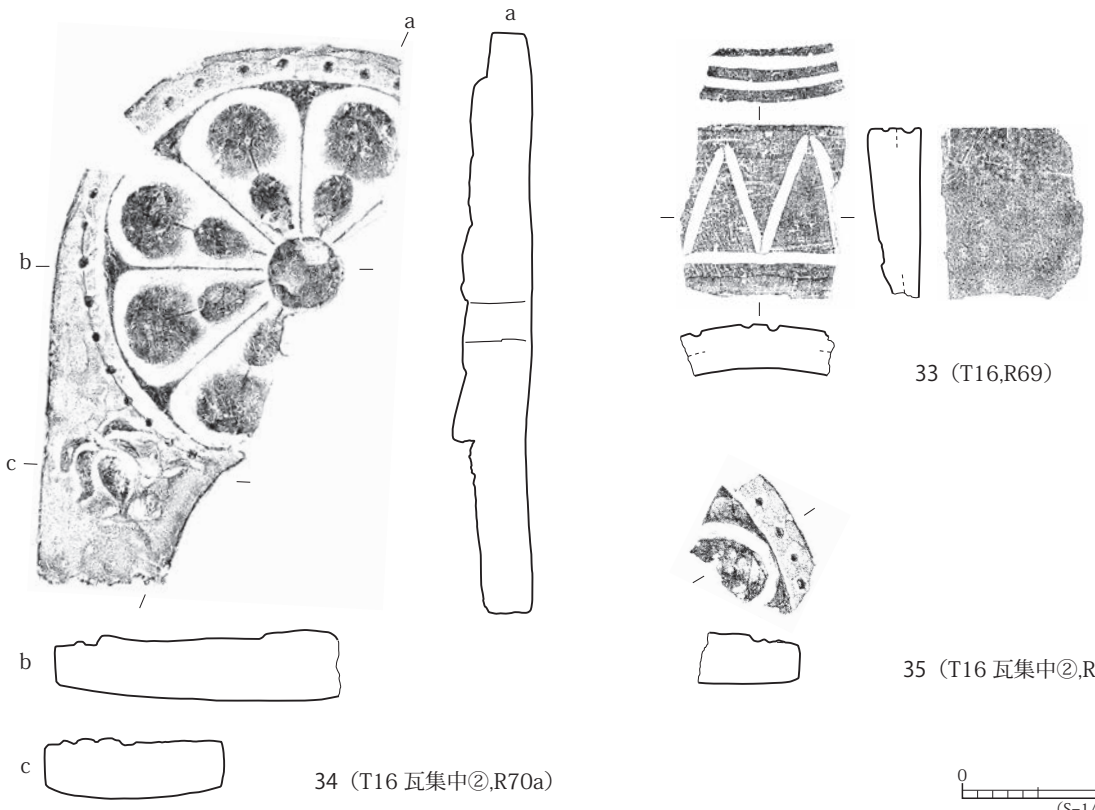
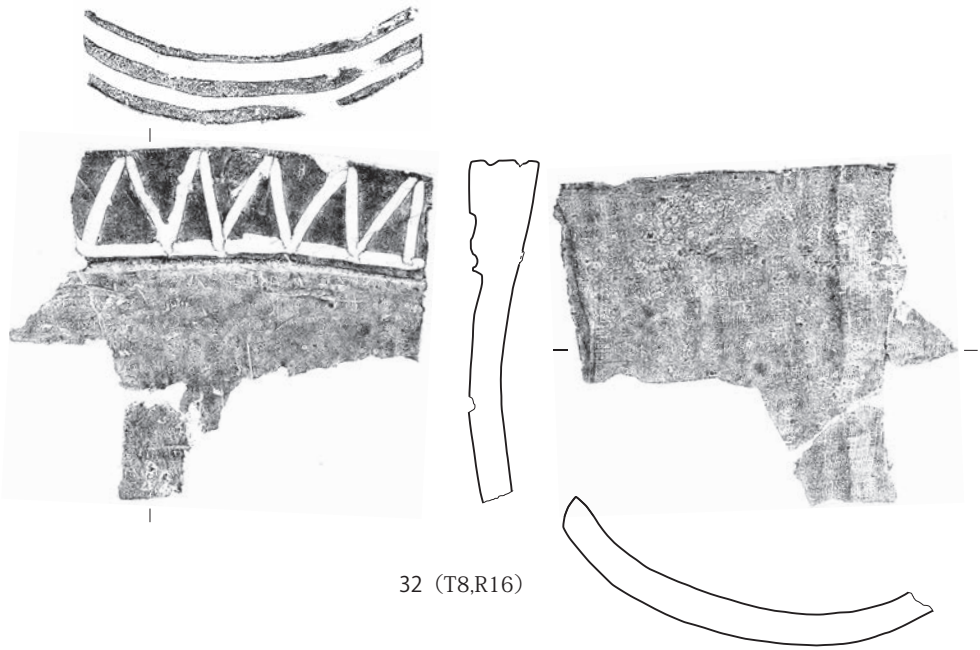
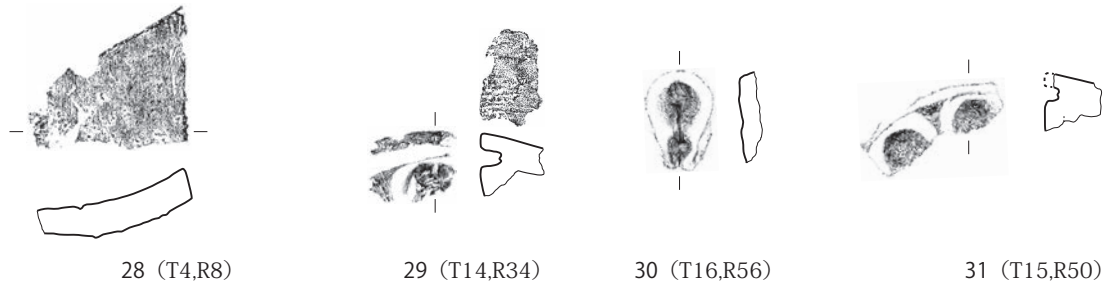


25 (T16,R67a)

26 (T16,R67b)

27 (T1,R18)

第19图 平瓦(3)



第 20 図 隅切瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼板

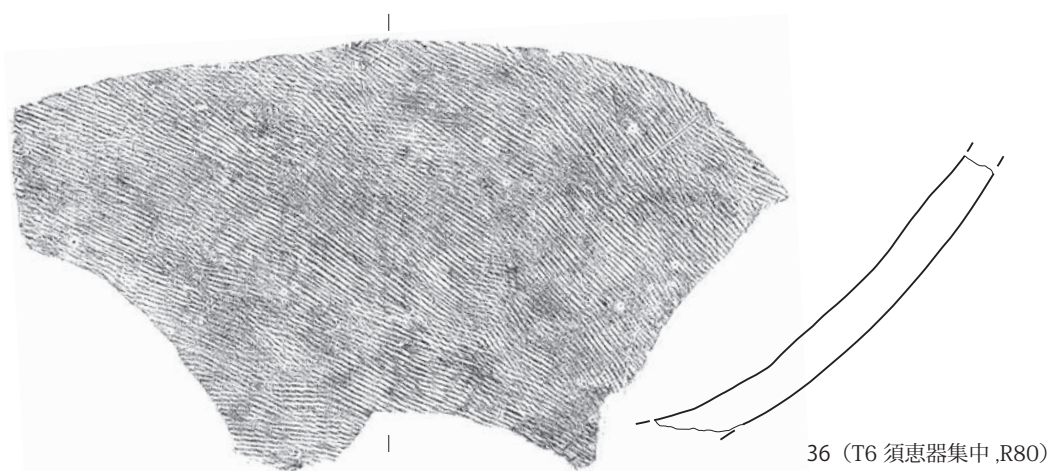
No.	区-層	種類	残存	特徴	分類	登録	写真図版 (登録)	箱番号
1	T4-I層	丸瓦	1/2	玉縁長6.0cm、厚さ3.0cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、玉縁中央へラ書き「下」、凹面：布目、側端・小口：ケズリ、色調：にぶい褐色(7.5YR5/3)	IIB-a	R3	4 (Y2580 ~ Y2582)	B16108
2	T4-I層	丸瓦	1/5	玉縁長6.7cm、厚さ2.6cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、玉縁中央へラ書き「下」、凹面：粘土紐積痕・布目、側端・小口：ケズリ、色調：暗灰黄色(2.5Y5/2)	IIB-a	R4	4 (Y2583 ~ Y2585)	B16108
3	T4-I層	丸瓦	玉縁片	厚さ1.0cm、凸面：ロクロナデ、へラ書き「下」、凹面：布目、小口：ケズリ、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	IIB	R2	4 (Y2586 ~ Y2588)	B16108
4	T4-I層	丸瓦	玉縁片	厚さ1.3cm、凸面：ロクロナデ、玉縁中央へラ書き「下」、凹面：布目、側端・小口：ケズリ、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	IIB	R1	4 (Y2586 ~ Y2589)	B16108
5	T14-I層	丸瓦	1/5	玉縁長7.1cm、厚さ2.5cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、玉縁中央へラ書き「下」、凹面：粘土紐積痕・布目、側端・小口：ケズリ、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	IIB-a	R48	4 (Y2590 ~ Y2592)	B16108
6	T14-I層	丸瓦	玉縁片	玉縁長5.6cm、厚さ2.1cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、玉縁中央へラ書き「下」、凹面：布目、側端・小口：ケズリ、色調：灰黄色(2.5Y6/2)	IIB-a	R31	4 (Y2593 ~ Y2595)	B16108
7	T6-瓦集中①	丸瓦	1/2	玉縁長8.3cm、厚さ3.6cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ、自然釉・窯壁片付着、凹面：粘土紐積痕明瞭・布目、側端・小口：ケズリ、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	IIB-a	R13	4 (Y2596 ~ Y2597)	B16108
8	T15-瓦集中③	丸瓦	玉縁片	玉縁長7.3cm、厚さ3.0cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ→へラ書き、凹面：粘土紐積痕・布目→ナデ→ケズリ、側端：ケズリ、小口：ナデ→両側ケズリ、色調：にぶい赤褐色(5YR5/3)	IIB-a	R53	4 (Y2598 ~ Y2599)	B16108
9	T15-I層	丸瓦	端部片	厚さ1.7cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ→分割線、凹面：布目、側端：ケズリ、小口：ナデ、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	II	R49	4 (Y2600 ~ Y2601)	B16108
10	T16-瓦集中②	丸瓦	1/6	厚さ3.3cm、凸面：縄叩き→ロクロナデ→分割線、凹面：布目(合せ目明瞭)、側端：ケズリ、色調：暗灰黄色(2.5Y5/2)	IIB-a	R57	4 (Y2602 ~ Y2603)	B16108
11	T3-I層	平瓦	広端 1/2	広端幅28.1cm、厚さ1.8cm、凸面：布目→ナデ、凹面：模骨痕・布目→ナデ、側端・小口：ケズリ、広端部中央付近両面に粘土塊付着・周辺黒色化、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	IA	R23	4 (Y2604 ~ Y2605)	B16109
12	T4-II層	平瓦	側端 1/2	長さ39.2cm、厚さ2.2cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→模骨痕・布目→ナデ、側端・小口：ケズリ、広端小口面に窯壁片等付着、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	IA-a	R10	5 (Y2606 ~ Y2607)	B16109
13	T4-II層	平瓦	広端 1/2	広端幅(30.5cm)、厚さ2.0cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：模骨痕・布目→ナデ、縦位に瓦片融着、側端・小口：ケズリ、焼き歪み顕著、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	IA-a	R9	4 (Y2608 ~ Y2609)	B16109
14	T6-I層	平瓦	広端一部欠	狭端幅26.3cm、長さ40.0cm、厚さ2.0cm、凸面：縄叩き→布目→ナデ、凹面：模骨痕・布目→ナデ、側端・小口：ケズリ、色調：灰褐色(7.5YR4/2)	IA-a	R88	5 (Y2610 ~ Y2611)	B16110
15	T14-I層	平瓦	4/5	幅(27.0cm)、長さ(33.5cm)、厚さ1.9cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→模骨痕・布目→ナデ、側端・小口：ケズリ、色調：にぶい褐色(7.5YR5/3)	IA	R44	5 (Y2612 ~ Y2613)	B16111
16	T15-瓦集中③	平瓦	端部片	厚さ1.4cm、凸面：斜行縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→模骨痕・布目→ナデ、小口：ケズリ、色調：淡黄色(2.5Y7/4)	IA-a	R55	5 (Y2614 ~ Y2615)	B16111
17	T2-3層	平瓦	側端部片	厚さ1.9cm、凸面：縄叩き→ナデ、凹面：糸切り痕→布目→ナデ・ケズリ、側端：ケズリ、色調：灰白色(2.5Y8/2)	IA-a	R26	5 (Y2616 ~ Y2617)	B16111
18	T16-瓦集中②	平瓦	端部片	厚さ2.2cm、凸面：縄叩き→布目→ナデ、凹面：糸切り痕→模骨痕・布目→ナデ、小口：ケズリ、色調：にぶい褐色(7.5YR5/4)	IA-a	R61	5 (Y2618 ~ Y2619)	B16112
19	T14-深掘	平瓦	端部片	厚さ1.7cm、凸面：ナデ→へラ書き「下カ」、凹面：模骨痕・布目→ナデ、小口：糸切り痕→ケズリ、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	IA	R29	5 (Y2620 ~ Y2622)	B16112
20	T12-I層	平瓦	側端部片	厚さ2.0cm、凸面：ナデ、凹面：模骨痕・布目、側端：ケズリ、色調：黒褐色(7.5YR3/2)	IB?	R27	5 (Y2623 ~ Y2624)	B16112
21	T12-I層	平瓦	側端部片	厚さ2.7cm、凸面：縄叩き、凹面：布目→ナデ、側端：ケズリ、色調：にぶい黄橙色(10YR7/4)	ID?	R28	5 (Y2625 ~ Y2626)	B16112
22	T17-I層	平瓦	破片	厚さ1.2cm、凸面：ケズリ→斜格子叩き、凹面：布目、色調：褐灰色(10YR5/1)、軒平瓦の頸部接合面が剥離した可能性あり	IC?	R72	5 (Y2627 ~ Y2628)	B16112
23	T6-A-4層	平瓦	側端部片	厚さ2.8cm、凸面：斜格子叩き(やや潰れ)、凹面：布目(半分摩滅)、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	IC?	R15	5 (Y2627 ~ Y2628)	B16112
24	T1-II層	平瓦	端部片	厚さ1.8cm、凸面：ナデ、凹面：布目→縄叩き→ナデ、側端・小口：ケズリ、色調：にぶい褐色(7.5YR5/4)	不明	R17	5 (Y2629 ~ Y2630)	B16112
25	T16-I層	平瓦	破片	厚さ2.1cm、凸面：蓮花文様の叩き、凹面：布目→ナデ、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	不明	R67a	5 (Y2631 ~ Y2632)	B16112
26	T16-I層	平瓦	側端部片	厚さ1.8cm、凸面：蓮花文様の叩き、凹面：模骨痕?→布目、縦位に瓦片融着、側端：ケズリ、色調：黒褐色(2.5Y3/1)	不明	R67b	5 (Y2631 ~ Y2632)	B16112
27	T1-II層	平瓦(焼台)	端部片	平瓦を転用した焼台に丸瓦片が融着、平瓦凸面：縄叩き→ナデ、接地面剥落、平瓦凹面：布目→ナデ、丸瓦凹面：布目、色調：黄灰色(2.5Y4/1)	不明	R18	6 (Y2633 ~ Y2634)	B16112
28	T4-I層	隅切瓦	端部片	厚さ2.2cm、平瓦分類不明、凸面：自然釉・窯壁片付着、凹面：布目→ナデ、側端：ケズリ、小口：約65度に切り落とし、色調：黒褐色(2.5Y3/1)	—	R8	6 (Y2635 ~ Y2636)	B16113
29	T14-I層	軒丸瓦	瓦当片	重弁蓮花文、凸面：縄叩き、色調：灰黄色(2.5Y7/2)	—	R34	6 (Y2637)	B16113
30	T16-I層	軒丸瓦	瓦当片	重弁蓮花文、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	—	R56	6 (Y2638)	B16113
31	T16-I層	軒丸瓦	瓦当片	重弁蓮花文、推定直径18.0cm、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	—	R50	6 (Y2639)	B16113
32	T8-I層	軒平瓦	瓦当片	二重弧文、瓦当厚さ4.4cm、顎面長さ7.5cm、平瓦部厚さ2.1cm、瓦当面：ケズリ→二重弧文、顎面：ケズリ→鋸歯文・直線文1本、平瓦部凸面：ナデ、凹面：模骨痕・布目→ナデ、色調：灰黄褐色(10YR5/2)	511a	R16	6 (Y2640 ~ Y2642)	B16113
33	T16-I層	軒平瓦	瓦当片	二重弧文、瓦当厚さ3.6cm、顎面長さ10.7cm、瓦当面：ケズリ→二重弧文、顎面：ケズリ→鋸歯文・直線文1本、凹面：布目→ナデ、色調：黄灰色(2.5Y5/1)	511	R69	6 (Y2643 ~ Y2645)	B16113
34	T16-瓦集中②	鬼板	1/2	高さ36.0cm、厚さ4.8cm、頭部アーチ形、外面：重弁蓮花文(直径26.0cm)、外側に連珠文、両脚部に蓮花の蕾、周縁ケズリ、背面・側端・下端・挟り部：ケズリ	950C	R70a	6 (Y2646 ~ Y2647)	B16114
35	T16-瓦集中②	鬼板	右上端部片	厚さ3.4cm、外面：重弁蓮花文、外側に連珠文、周縁ケズリ、側端・背面：ケズリ	950C	R70b	6 (Y2648 ~ Y2649)	B16114

表6 出土瓦(第16~20図)観察表

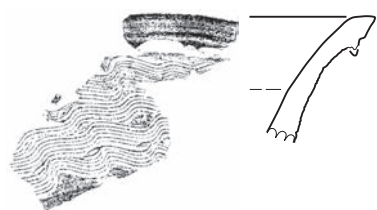
		T1	T2	T3	T4		T5	T6			T10	T14	T15	T16	T17	T21	表採 排土	
		I層	I層	1・3層	I層	I層	II層	A-1層	I層	I層	II層	A-1～5層	A-4層	I層	I層	1～2層		I層
須 恵 器	坏類										1							
	壺・甕類	2		1		2			1		1	6※	2	1		3	2	1
土 師 器	不明					1				1				1	1			
	坏							1			1				1			
	甕			1					1				1				2	
縄 文 土 器	不明		6	3		5			1				1					1
	砥石				1	6	1	2		1								
	砥石					1				1								

表7 出土土器・石製品点数集計表

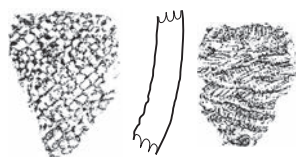
※須恵器集中出土



36 (T6 須恵器集中, R80)



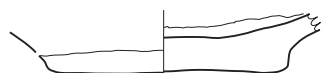
37 (T1, R73)



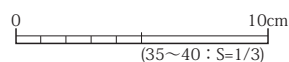
38 (T10, R81)



39 (T16, R83)



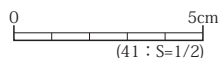
40 (T6, R78)



(35~40 : S=1/3)



41 (T4, R74)



(41 : S=1/2)

No.	区-層	種類	残存	特徴	登録	写真図版 (登録)	箱番号
36	T6-A-4層 須恵器集中	須恵器・甕	体部片	外面：平行叩き、内面：同心円状当て具痕→ナデ、色調：橙色 (7.5YR7/6)	R80	6 (Y2650)	B16115
37	T1-I層	須恵器・甕	口縁部片	外面：ロクロナデ、櫛描波状文、内面：ロクロナデ、色調：外面 黒褐色 (2.5Y3/1)、内面暗灰黄色 (2.5Y5/2)	R73	6 (Y2652)	B16115
38	T10-I層	須恵器・甕	体部片	外面：格子叩き、内面：同心円状当て具痕、色調：褐灰色 (10YR4/1)	R81	6 (Y2652 ~ Y2653)	B16115
39	T16-I層	須恵器・壺	底部片	外面：回転ヘラケズリ→高台貼付→ロクロナデ、内面：ロクロナデ、 色調：黄灰色 (2.5Y4/1)	R83	6 (Y2652)	B16115
40	T6-I層	土師器・甕	底部片	外面：木葉痕、内面：ナデ、胎土に光沢のある鉱物を多く含む、色調： にぶい褐色 (7.5YR5/4)	R78	6 (Y2652)	B16115
41	T4-I層	砥石	破片	残存長さ 4.4cm、幅・厚さ 3.2cm、側面 4面および上面を研磨、 上部に穿孔 2箇所、うち 1箇所は欠損	R74	6 (Y2655 ~ Y2657)	B16115

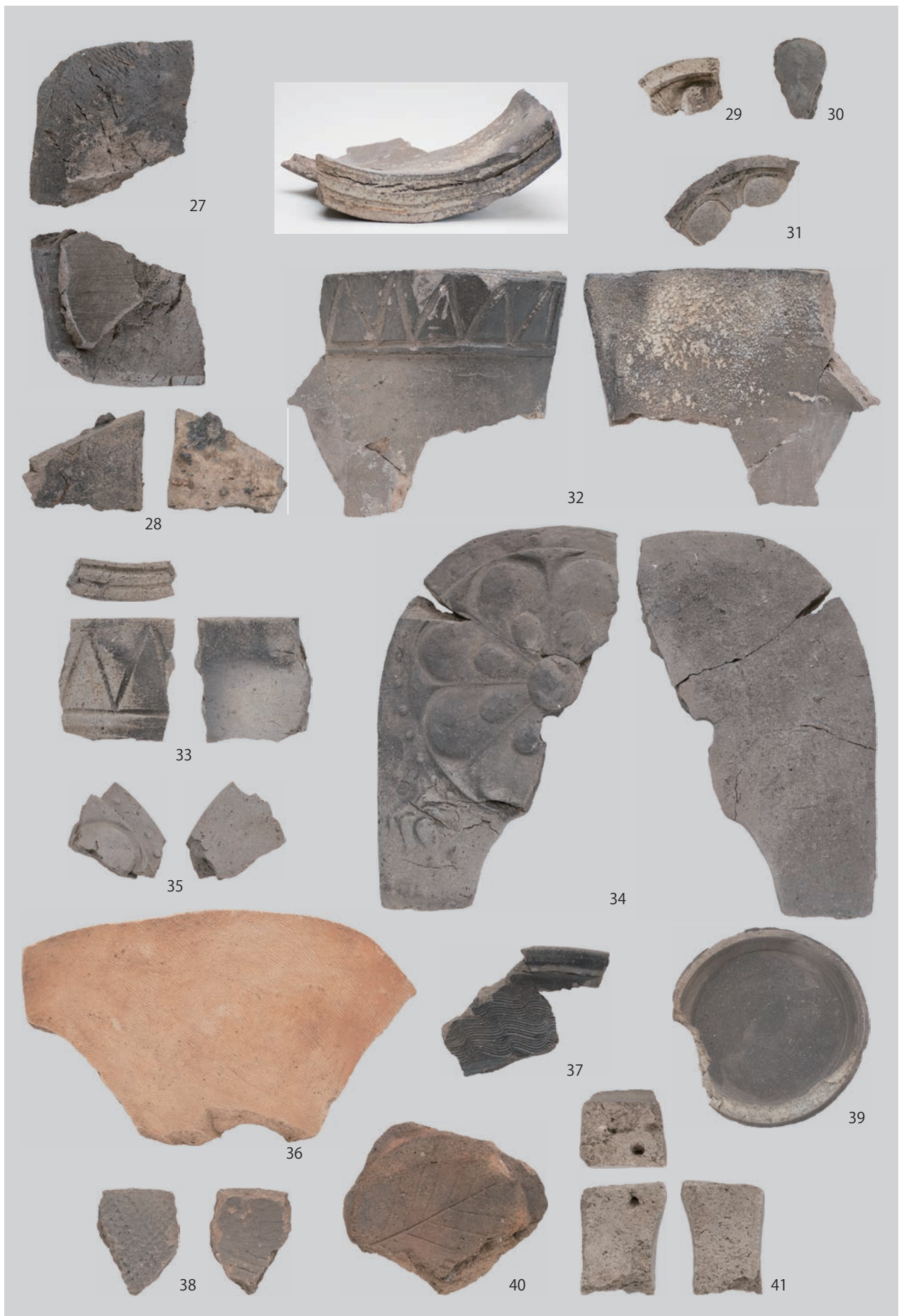
第21図 土器・石製品



写真図版4 遺物写真(1) 文字拡大は約2/3、11・12は1/6、それ以外は1/5



写真図版5 遺物写真(2) 文字拡大は約2/3、13~15は1/6、それ以外は1/5



写真図版6 遺物写真(3) 27・28・32～35:1/5 29～31・36:1/4 37～40:1/3 41:1/2

⑥鬼板（第 20 図 34・35）

T 16 の瓦集中②から 2 点（3,980g）出土したが、色調が異なるため別個体と考えられる。いずれも過去に出土した型番 950 C（第 6 図 10・11）と同型とみられる。34 は左側半分以上が残存する。頭部はアーチ型で、中央下部に方形の釘穴がある。中央に重弁蓮花文、その外側に連珠文、左下脚部に蓮花の蕾の文様を配し、表面の周縁、側面、背面にはケズリ調整が施される。950 C では左脚部に箔による陽出文字「小田建万呂」（第 6 図 10）があることが知られているが、34 では本来文字があったであろう位置にもケズリ調整が施されており、文字の有無は確認できない。35 は連珠文の間隔から、右上部の破片とみられる。

（2）その他の出土遺物

窯壁は 4,890g 出土した（表 5）。分布は T 3・T 4・T 6（S R 1～灰原 A）に偏る。粘土にスサが入るものと、入らないものに分けられるが、後者は窯内部で被熱した地山塊と考えられる。

土器は、須恵器の坏・甕・壺、土師器の坏・甕、縄文土器片（晩期）が出土した（表 7、第 21 図 36～40）。須恵器（36～39）は甕の破片を中心に調査区全域から出土しており、特に T 6 の灰原 A - 4 層では、大型の甕の体部破片（36）がまとまって出土した。甕の口縁部には櫛描波状文（37）、体部には平行叩き（36）と格子叩き（38）がみられ、内面に同心円状の当て具痕がある。39 は高台付きの底部破片で、径や厚さから壺とみられる。

石製品は、砥石が 2 点出土した（表 7、第 21 図 41）。41 は方柱状の砥石片で、上部に穿孔があり、携帯用の提砥と考えられる。

7. 総括

（1）遺構

今回の調査で検出した S R 1～8 と灰原 A～C の分布を第 22 図にまとめた。窯は位置関係から、現状では以下の 4 群に分かれる。

A 群：S R 1・2、**B 群**：S R 3、**C 群**：S R 5～7、**D 群**：S R 8

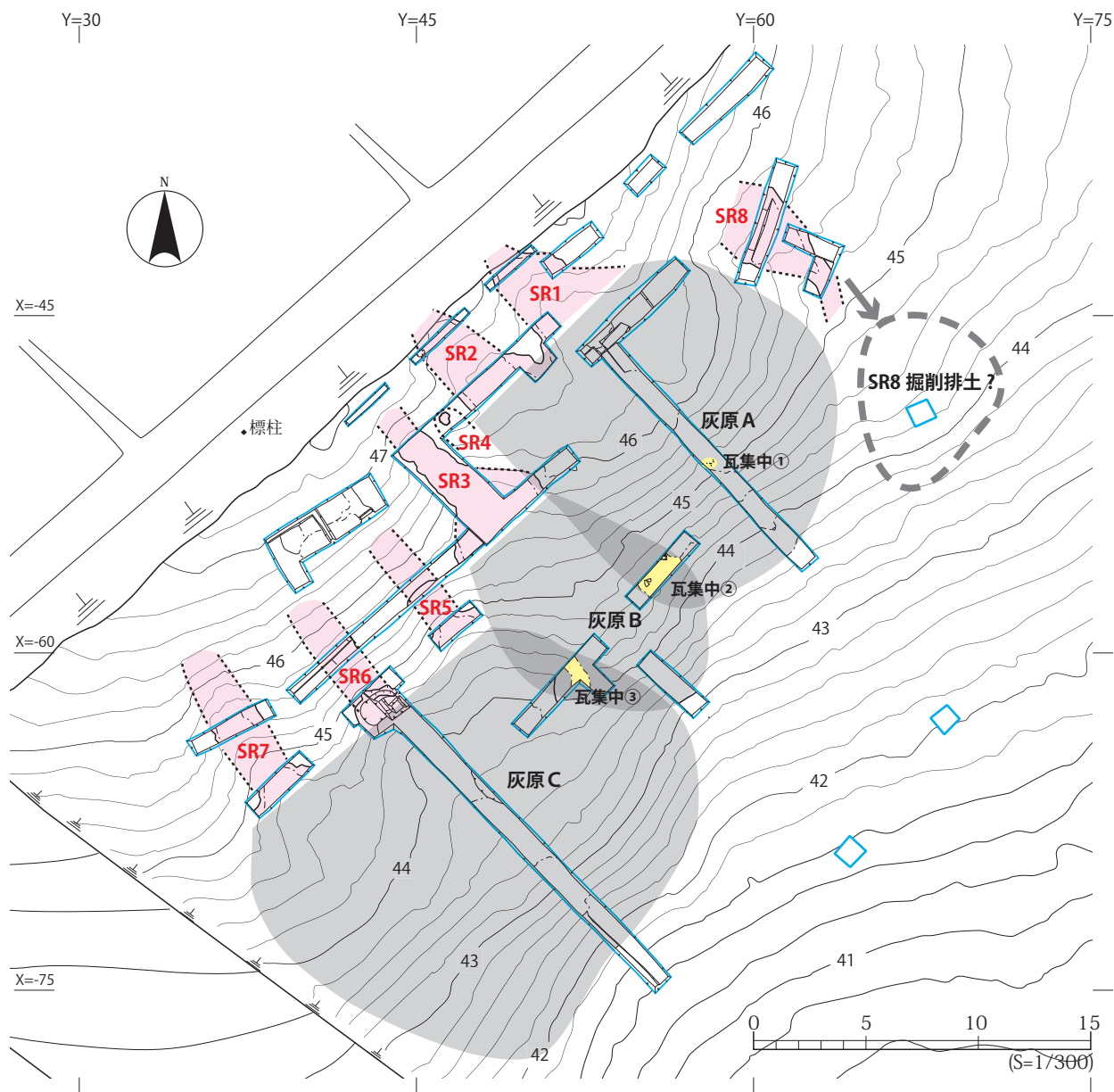
なお、煙出しのみ検出した S R 4 については、後述する通り B 群の S R 3 と重複し、C 群に属する可能性がある。

A 群は斜面上部に位置し、S R 1・2 がおおむね焚口の位置を揃えて並んでいたとみられる。両者は検出面で約 2.4 m（中心間で約 4.4 m）の距離がある。農道開削の際に窯体の過半が失われており、昭和 40 年代に発見された資料（第 5・6 図）はこれらの窯に伴う可能性が高い。また、南東側には大規模な灰原 A が広がる。このうち、A - 4 層は窯の掘削排土とみられ、それより古く炭・焼土を含む A - 5 層が堆積していることから、窯を掘り直しながら繰り返し操業したことが想定される。

B 群は S R 3 の 1 基のみで、平面分布・標高ともに A 群と C 群の中間に位置する。検出面では、A 群の S R 2 から約 2.1 m、C 群の S R 5 から約 1.2 m、また S R 4 煙出しから約 0.8 m の距離がある。S R 4 は窯体を未確認だが、煙出しの斜面下方に窯体が延びる場合、S R 3 と一部重複する可能性が

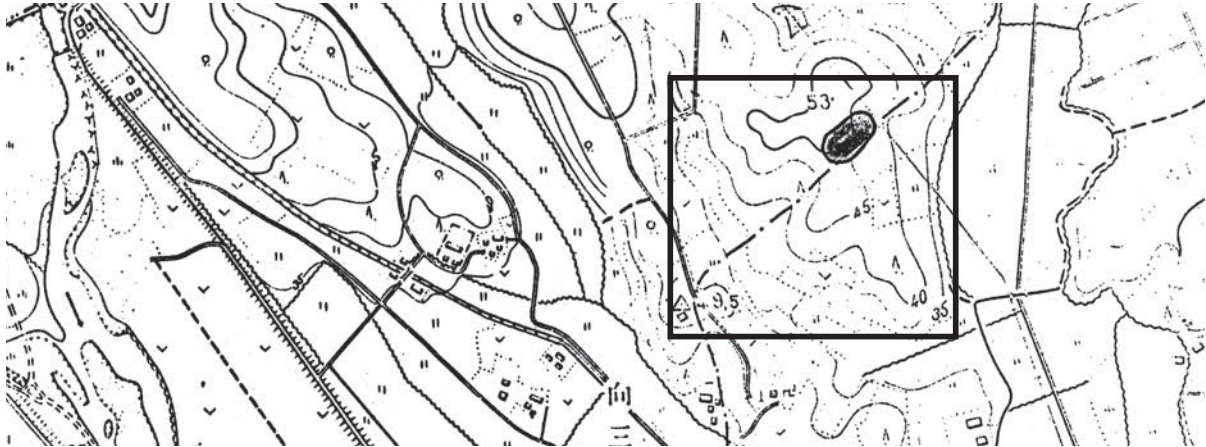
高いため、同時操業とは考えにくい。SR 3・4の斜面下方にはマウンド状に盛り上がる灰原Bがあり、地山ブロックを多く含むB - 2層は、SR 3または4の掘削によって形成されたとみられる。B - 2層上にある瓦集中②③もSR 3または4の操業に由来する可能性があるが、窯同士の新旧関係等をさらに精査して判断する必要がある。

C群は斜面下方に分布する一群で、SR 5～7がおおむね焚口の位置を揃えて並んでいたとみられる。これらは、検出面では2.6～2.8 m（中心間で4.8～5.5 m）の距離があり、SR 5の推定中軸線から約5 m北東側にSR 4煙出しがあることから、SR 4もC群に含まれる可能性がある。SR 5～7のうち、SR 7は窯体天井が全体的に崩落しているが、SR 5・6は天井が崩れずに残っている可能性が高い。SR 5～7の南東側には大規模な灰原Cが広がる。灰原Aと同様、掘削排土とみられるC - 2層の下に炭・焼土を含むC - 3層が堆積していることから、窯を掘り直しながら繰り返し操業が行われたことがうかがえる。

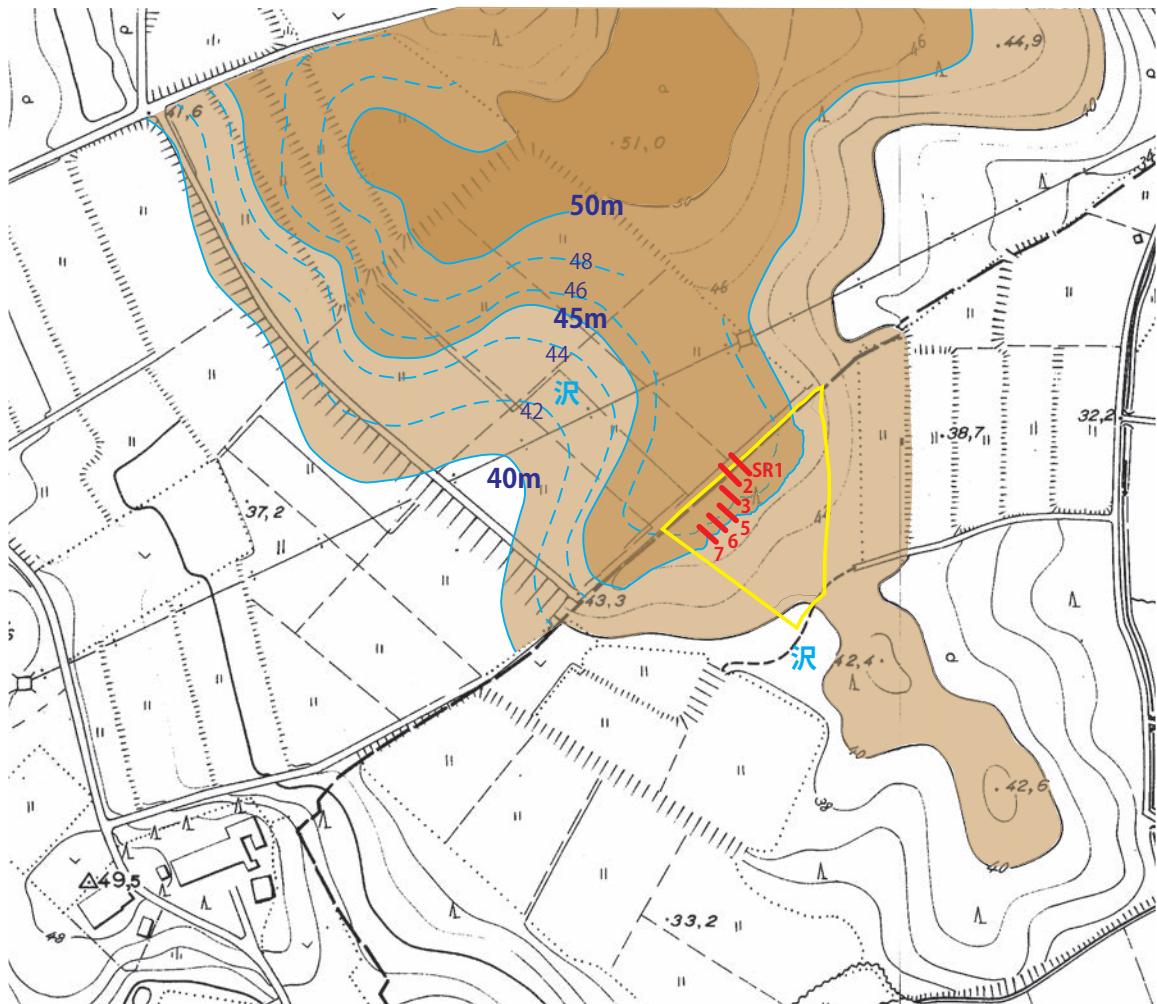


第22図 検出した窯と灰原の分布

D群は最も北東側に分布し、灰原Aの北側でSR8を検出した。窯体の位置・方向は未確認だが、北西部(T1)の幅の広い部分が前庭部付近、南東部(T9)の幅の狭い部分が排水溝と想定される。前庭部の標高は、灰原A南西側にあるSR3と近い位置にある。SR8の斜面下方は、地山ブロックを多く含む層でマウンド状に盛り上がり、SR8の掘削排土によって形成されたとみるのが自然であろう。排水溝の南側延長は、この掘削排土と灰原Aの間へ続くと思われる。なお、SR8では作業に伴う炭・焼土等の分布は確認されておらず、窯体の確認も含めて次年度以降の課題としたい。



開田前の旧地形図 (大崎市教委保管、原図1万分の1、枠線が下図の範囲)



地形図と今回の測量成果から復元した等高線

第23図 旧地形と窯の立地

以上より、特にA群とC群については複数の窯が同時に操業していた可能性があり、大規模な灰原を形成したとみられる。

次に、旧地形と窯の立地についてまとめておく。今回の調査対象地の北西側は、昭和40年代の開田によって平坦に造成されており、旧地形をうかがい知ることはできない。開田前の地形を示す資料として最も分かりやすいものが第23図上で、宮城県教育委員会および大崎市教育委員会で史跡指定時の資料とともに保管されている。測量年等は不詳であるが、この図を平成2年測量の都市計画図に重ねて地形を推定復元し、今回検出した窯の位置を加えたものが第23図下である。

大吉山瓦窯跡の立地する丘陵は、基本的に江合川に沿って北西から南東方向の尾根が徐々に標高を減じながら延びている。丘陵の南西斜面は、北東～南西方向に開く複数の沢によって開析されており、旧地形図からは開田された部分もかつて沢地形だったことがうかがえる。窯群は、これらの沢の開析により形成された丘陵鞍部の北西側にある南東向き斜面を選定したことがうかがえる。また、今回は工房等の遺構は検出されなかったが、窯群の南～東側にかけて広がる緩斜面にこれらが分布することも想定される。

さらに細かく見ると、窯群は南西から北東方向に標高を上げながら分布する。おそらく南西側は丘陵先端に向けて痩せ尾根状になるため、SR5～7は丘陵頂部に近く、より上方には窯を築きにくい地形だったと考えられる。逆に北東側は丘陵頂部まで距離があったため、SR1・2が斜面上方に築かれたことがうかがえる。なお、SR5～7より南西側は、指定地外に窯・灰原が広がる可能性があるものの、植林等による地形改変が行われており、現況では確認が難しい。一方、SR8より北東側は徐々に傾斜を緩めながら丘陵北東側の斜面に方向を変えていくため、今回検出した一連の窯群は、SR8で一旦途切れる可能性が高い。ただし、周辺の別の斜面に窯が分布する可能性は十分に残されているといえよう。

(2) 瓦

ここでは、大吉山瓦窯跡における過去の採集資料とそれに基づく見解をまとめたうえで、今回の出土資料で新たに分かってきたことや今後の検討課題についてまとめる。

①昭和40年代採集資料とその後の見解

大吉山瓦窯跡が発見された当時の採集資料としては、丸瓦4点、平瓦2点、軒丸瓦3点、鬼板2点がある(第5・6図)。多賀城の分類・型番によると、丸瓦Ⅱ類が2点、ⅡB類aタイプが2点、平瓦ⅠA類aタイプが1点、平瓦ⅠB類と推定されるものが1点、重弁蓮花文軒丸瓦129が2点、重弁蓮花文鬼板950Cが2点のほか、該当する型番のない軒丸瓦が1点ある(第6図9)。丸瓦ⅡB類aタイプ2点には、玉縁に「下」のヘラ書きがみられる。また、周辺採集資料として二重弧文軒平瓦511-aがある(註2参照)。基本的にこれらの資料をもとに、これまで大吉山瓦窯跡の位置づけが検討されてきた。

『本文編』では、当時知られていた第Ⅰ期の窯跡として、木戸窯跡群、日の出山窯跡群、大吉山窯跡群の3つを挙げてその変遷を検討した(以下、遺跡名称の「窯跡群」「瓦窯跡」を原則省略する)。

このうち大吉山については、重弁蓮花文軒丸瓦 129、二重弧文軒平瓦 511-a タイプ、丸瓦Ⅱ B 類、平瓦Ⅰ A 類 a タイプ、重弁蓮花文鬼板 950 C があること、丸瓦の中には玉縁に「下」「毛」の文字瓦がみられること、鬼板 950 C は日の出山 D 地点の方形鬼板 950 B の範をアーチ型に改変して作られたものであることを指摘した。窯跡群の変遷については、軒丸瓦や鬼板の変遷を検討した上で、「日の出山窯跡群が最も早く操業を開始し、中断期間があるものの最後まで活動していたこと、木戸窯跡群はその途中の 1 時期に、そして大吉山窯跡群は、木戸窯跡群の後で日の出山窯跡群の最終期より 1 時期前に操業していた」（『本文編』 p.371）と推定した。

その後、下伊場野窯跡群の発見・調査により、下伊場野・木戸→日の出山→大吉山という変遷を新たに提示するとともに、大吉山については、先述の鬼板を根拠として日の出山からの工人の移動を指摘した（『関連 19』）。ただし、木戸については、日の出山の操業開始より後出に位置づける説もある（大河原 2002、吉野 2016）。

第Ⅰ期の瓦生産の変遷と供給先を検討した大河原（2002）は、軒丸瓦の瓦当が厚手から薄手へ変遷することを指摘し、日の出山を第Ⅰ期（厚手）と第Ⅱ期（薄手）に分け、第Ⅱ期を畿内系工人とのかわりから天平 9（737）年に近い年代とした。大吉山の軒丸瓦 129 は薄手の型式であり、鬼板の変遷と合わせて、日の出山第Ⅱ期に位置づけた。木戸は大吉山より先行して操業を開始し、日の出山第Ⅱ期には 3 つの窯で大々的に瓦を供給したと推定している。また、大吉山の瓦の供給先は、軒丸瓦 129 と鬼板 950 C の出土が多賀城跡に限定され、多賀城廃寺では出土していないことから、多賀城跡を中心に供給されたことを指摘している。

以上、代表的な見解のみ取り上げたが、大吉山の位置づけは第Ⅰ期の窯跡群の中では新しい方ということで共通している。ただし、発掘調査が行われなかったために、これまであまり多くの検討はできなかったというのが実態である。

②第Ⅰ次調査出土資料の検討

今回の調査では表土出土の瓦が大部分であるが、丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・鬼板・隅切瓦が出土した。これまでの採集資料に軒平瓦と隅切瓦も加わり、大吉山はこれら多様な種類の瓦を生産する窯であったことが分かる。採集資料も含めた出土位置でみると、斜面上方では、農道が開削された部分で軒丸瓦と鬼板（第 6 図）、T 8 から軒平瓦（第 20 図 32）が出土している。また、斜面下方では、T 14～16 から軒丸瓦（第 20 図 29～31）、T 16 から軒平瓦と鬼板（第 20 図 33～35）が出土している。また、文字瓦についても、斜面上方の T 4 と斜面下方の T 14 で出土しており、今のところ斜面の上方と下方、あるいは窯 A 群～D 群で目立った違いはみられない。

以下では、今回出土した各種の瓦について、特に関わりが想定される木戸・日の出山、および供給先である多賀城跡・多賀城廃寺跡の資料を中心に比較検討する。

【丸瓦】

確認されたのはⅡ B 類のみで、叩き目はすべて縄叩き（a タイプ）である。多賀城跡でも主体を占める丸瓦で、年代や生産遺跡の限定が難しい。日の出山では a タイプ以外に、格子叩き（b タイプ）と矢羽根叩き（c タイプ）が出土しており、木戸は a タイプに限られる。

【平瓦】

分類可能な大部分が平瓦 I A 類であった。日の出山は、地点によって桶巻き作りの I A ~ I D 類のほか、1 枚作りの II A 類や II B 類 a2 タイプといった多様な製作技法が確認される（『関連 36』 p.41）。木戸では発掘調査した 3 地点いずれも平瓦は I A 類を主体とし、大吉山と類似する。ただし、報告書掲載資料を比較する限りでは、木戸の I A 類は特に凸面のナデが丁寧で、叩き目等の痕跡を残さないものが多いのに対し、大吉山はナデが粗く、叩き目や布目を残すものが多いという印象を受ける。これが両遺跡の違いとして明示できるかどうかは、今後の課題である。

【軒丸瓦】

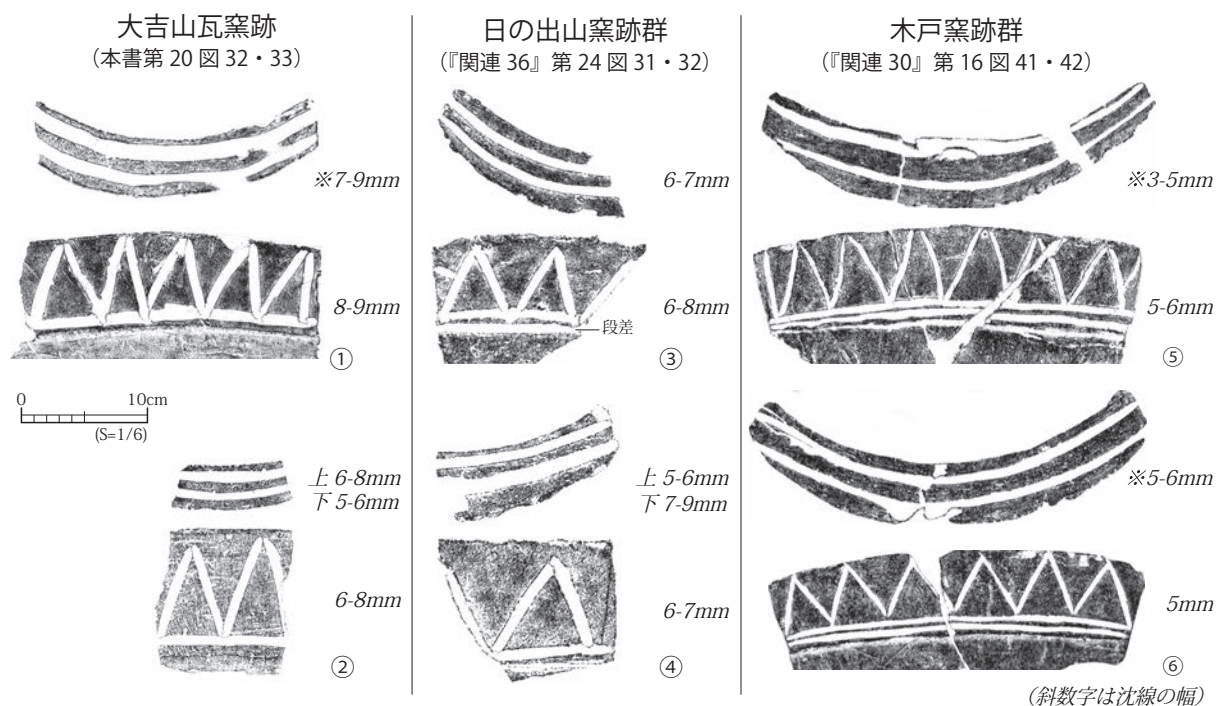
今回の出土資料では分類可能なものがないが、第 20 図 31 は型番 129 とは異なっており、類例や供給先等は今のところ不明である。過去の採集資料第 6 図 9 も含めて、次年度以降の成果を期したい。

【軒平瓦】

今回の調査で二重弧文 511 が 2 点（第 20 図 32・33）出土し、大吉山瓦窯跡で出土した軒平瓦としては初出といえる。32 は平瓦 I A 類を用いた 511- a タイプで、33 も凹面にナデが施されていることから、同タイプの可能性が高い。2 点とも沈線の幅が 5 ~ 9 mm と太く、顎面の鋸歯文の下を画す直線文が 1 本という特徴がある。

二重弧文軒平瓦 511 は多賀城跡・多賀城廃寺跡で多数出土する^(註5)。このうち、多賀城政庁跡出土の 511-a では、顎面の鋸歯文の下を画す直線文は 2 本のもの（『図録編』 PL.75）が 7 割を占め、1 本のものは 3 割と少数派である（『本文編』 p.197）。多賀城廃寺跡でも 2 本のもの（『廃寺跡』 図版 45- 5）を主体としながら、1 本の例があることが報告されている（『廃寺跡』 p.42）。

軒平瓦 511-a は木戸と日の出山でも出土しており、代表的なものを第 24 図③~⑥に示した。顎面の文様は直線文を 1 本ないし 2 本引いた後に、鋸歯文を図の左から右方向（木戸⑥では右から左）へ



第 24 図 二重弧文軒平瓦 511-a の比較

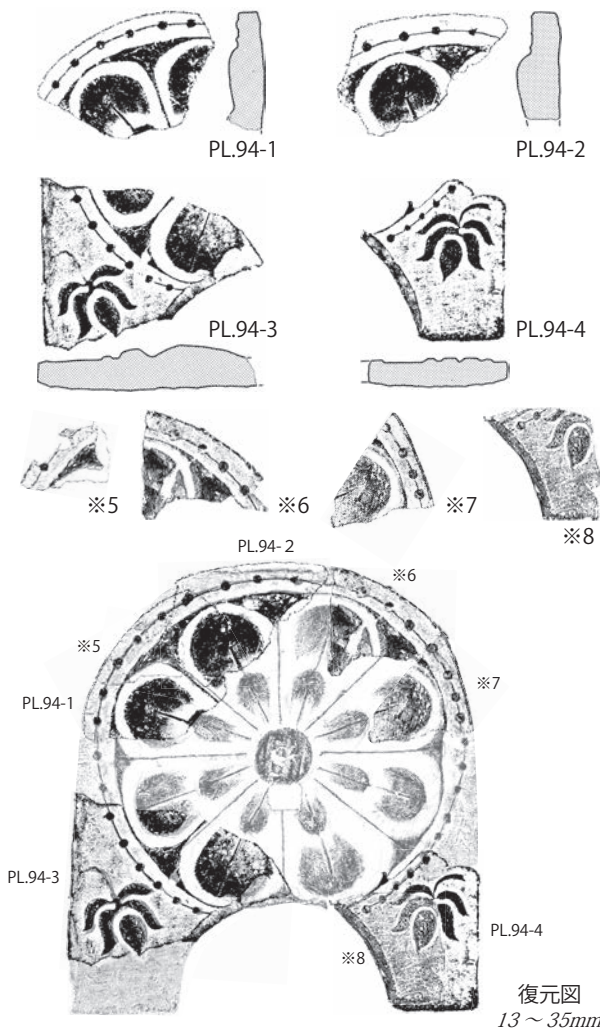
(斜数字は沈線の幅)
※焼成時に裂けた部分は計測の対象外

描く。木戸では⑤⑥以外にも 511-a が多数出土しているが、鋸歯文の下を画する直線文は 2 本もしくは 0 本で、1 本のもの確認されない（『関連 32』 pp.35-36）。『関連 30～32』に掲載した 7 個体を計測したところ、いずれも沈線の幅は 5 mm 前後を主体とする。一方、日の出山では B 地点で採集されているほか、F 地点東斜面で少数出土している。F 地点出土の③④は沈線の幅 6～9 mm で、鋸歯文の下を画する直線文は 1 本である。よって、今回検討対象とした資料では、直線文の本数と沈線の幅について、大吉山と日の出山の類似が認められる^(註6)。そのほかにも瓦当の厚さ、顎面の長さ、沈線の施文方向なども比較したが、点数が少なく窯ごとの共通点や相違点は見出せなかった。

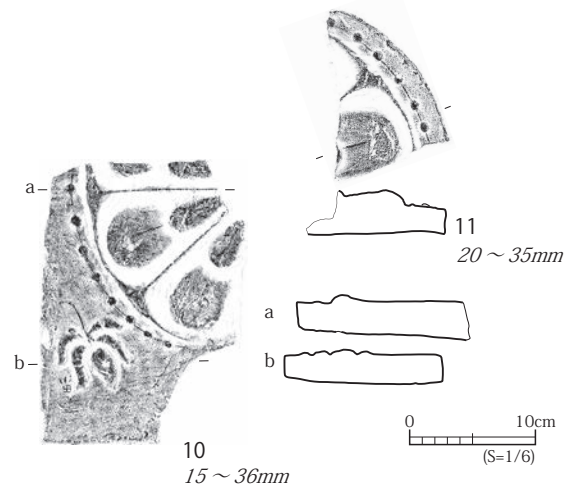
【鬼板】

鬼板 950 C の出土例は多賀城政庁跡と大吉山に限られ、それらを第 25 図にまとめた。多賀城政庁跡では破片 8 点（第 25 図左）が出土しており、これらを復元すると、左上で 3 片が重複することから、最低でも 3 個体あったことが分かる。これらと、大吉山発見時に出土した 2 片（第 6 図 10・11）については、全体的に厚さ 20mm 前後（最大で 36mm）と鬼板としては薄く、背面全体にケズリを施す点が特徴である。

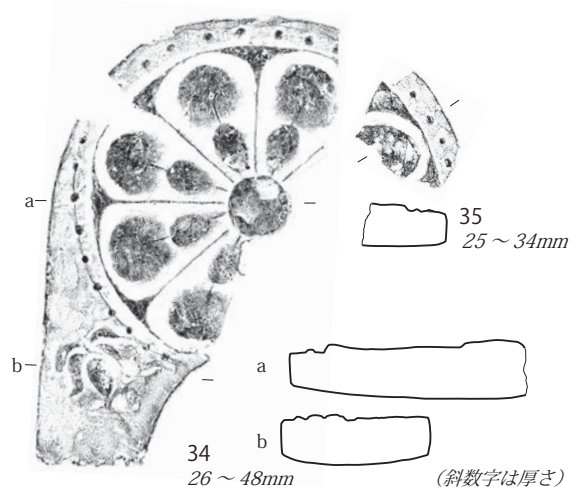
多賀城政庁跡（『図録編』 PL.94 ※5～8 は新規報告）



大吉山瓦窯跡（本書第 6 図）



大吉山瓦窯跡（本書第 20 図）



第 25 図 鬼板 950C の比較

今回の出土資料（第 20 図 34・35）についても、背面全体にケズリが施されているが、厚さは 34 の蓮花文部分で 40mm 前後、周縁でも 25mm 以上ある。35 も厚さ 30mm 前後あり、これまでに出土した 950 C と比べ厚手である。また、蓮花文外側の珠文を結ぶ細線が上半部で完全に消滅しているほか、蓮弁も全体的に扁平で、範の摩滅が顕著といえる。左脚部の陽出文字「小田建万呂」について、第 6 図 10 はケズリ調整で一部が消えているが、第 20 図 34 は全体にケズリ調整が施されており、調整前の文字の有無が判定できない。これらの違いについて、第 6 図 10・11 は斜面上部の農道部分、第 20 図 34・35 は斜面下方の瓦集中②から出土していることから、大吉山の中での細かな製作の新旧等を反映している可能性がある。

【文字瓦「下」】

丸瓦で 9 点、平瓦で 1 点確認し、いずれもヘラ書きの「下」である。丸瓦「下」の例は窯跡発見時から知られており（第 5 図）、そのほかに「毛」の文字瓦が出土したとされている（進藤ほか 1975-p.41 など）が、今回の調査資料および過去の採集資料のなかには確認できなかった。平瓦の例（第 19 図 19）は今回新たに確認されたもので、I A 類の凸面にごく細い線で書かれた稚拙な字体である。

ヘラ書き「下」文字瓦は、日の出山窯跡群にも例がある。F 地点西斜面の S I 1 住居跡出土例では、丸瓦 II B 類 c タイプの玉縁に書かれている（『関連 34』p.14）。また、F 地点東斜面の S R 6 窯跡出土例では、平瓦 I A 類の凸面にヘラ書き「下」があり、同じ瓦の凹面に陽出左文字「下」がある（『関連 36』p.27）。このほか、B・D 地点で採集されているとのことだが、瓦の種類等詳細は明らかでない。文字の意味については、下野国・下総国など造瓦を負担した東国諸国の国名と考えられており、下伊場野では東海道諸国の国名がみられるのに対し、日の出山では上野・下野等の東山道諸国が加わることが指摘される（吉野 2017-p.87 など）。大吉山では「毛」の有無は慎重に判断すべきだが、「下」については日の出山との共通点といえる。

多賀城跡と多賀城廃寺跡出土の文字瓦を集計した高野ほか（1976・2000）によると、丸瓦玉縁部のヘラ書き「下」は、多賀城で 72 点、廃寺で 189 点あり、ヘラ書き文字瓦の中で最も多い。字画が単純なため分類しにくい、今回出土した資料のうち、2 画目が左に開く特徴的な字形（第 16 図 5）は、廃寺出土資料で類例を確認した（写真①）。また、平瓦凸面の「下」は、多賀城で 3 点、廃寺で 14 点ある。このうち、ごく細い線で書く稚拙な字体（第 19 図 19）の類例を、廃寺出土資料で確認した（写真②）。これらが直ちに大吉山の製品とは言えないが、これまで多賀城跡を中心に考えられてきた大吉山の瓦の供給先について、多賀城廃寺跡も含めて検討する必要がある。

③まとめ

大吉山出土瓦については、丸瓦 II B 類 a タイプ、平瓦 I A 類（軒平瓦 511a）の技法が主体となるという点で木戸と類似するが、ナデ



写真①丸瓦ヘラ書き「下」 Y2685
(R-014 Box-29)



写真②平瓦ヘラ書き「下」 Y2686
(R-008 Box-26)

①②ともに多賀城廃寺跡 1975 年調査、表土出土、縮尺約 1/2

の粗さや軒平瓦の顎面文様など差異も認められる。一方、顎面文様や文字瓦「下」、鬼板 950 (B→C) については、日の出山との関わりをうかがわせる。大吉山の中での細かな新旧関係も想定されるため、次年度以降の調査の課題としたい。

註1：『保存管理計画』では昭和49年に発見されたとしているが、大崎市教育委員会が保管している指定当時の書類には「昭和47年6月(中略)子供が瓦を発見」としており、発見者である後藤正彦氏に確認したところ昭和47年が正しいとのことであった。なお、「大吉山」の地名は、発見者の曾祖父の代に、この丘陵を所有していた元の地権者の名前をとって「大吉山」と呼び慣わしていたとのことである。

註2：このほかにも大吉山瓦窯跡出土として重弧文軒平瓦1点が報告されている(古川市教委・図書館1979-p.9、同1980-p.47)。しかし、注記に「荘厳寺西S.46.3」とあり、大吉山瓦窯跡の発見より古く、位置的にも荘厳寺の北にあたる大吉山瓦窯跡とは考えにくい。さらに古い資料として、昭和10年に内藤政恒が撮影した写真に「大吉山」の瓦2点(軒丸瓦と丸瓦ヘラ書き「下」;内藤政恒瓦研究会2015)があるが、これらについても採集場所が現在の大吉山瓦窯跡と一致するかどうかは不明である。小寺・杉ノ下遺跡などでも瓦が出土することから、昭和47年より前の資料については、大吉山瓦窯跡の周辺一帯を含めた採集品とみるべきであろう。

註3：22は叩きの前にケズリ調整を施している。平瓦凸面のケズリ調整は軒平瓦の顎面にみられる(32・33)ため、22の斜格子叩きは顎面接合時の補強のために施されたものが、焼成時に剥落した可能性がある。23も断面が肥厚しているため、同様に軒平瓦となる可能性がある。

註4：凹面に縄叩きを施す瓦は多賀城跡南門地区で複数報告しており(『外郭I』図版127)、道具瓦の可能性もあるが、明確には分類していない。凸面にナデ調整を施さない点など、本資料とは一致しない点もある。

註5：政庁跡では二重弧文511が952点(軒平瓦の33.6%)出土し、細分可能なものでは511-aタイプが71%を占める(『本文編』pp.196-197)。

註6：昭和46年採集の重弧文軒平瓦(註2参照)は、顎面の鋸歯文の下の直線が2本である。また、杉ノ下遺跡でも同様の瓦が出土している(古川市教委2003第123図)ことから、大吉山周辺でこのような軒平瓦も生産していた可能性はある。

引用・参考文献

- 伊東信雄 1960「東北出土の蓮花文鬼板」『東北考古学』第1輯 東北考古学会
大河原基典 2002「多賀城創建期における瓦生産の展開」『宮城考古学』第4号 宮城県考古学会
進藤秋輝・高野芳宏・渡辺伸行 1975「多賀城創建瓦の製作技法」『研究紀要』Ⅱ 宮城県多賀城跡調査研究所
高野芳宏・進藤秋輝・熊谷公男・渡辺伸行 1976「多賀城の文字瓦(その1)」『研究紀要』Ⅲ 多賀城跡調査研究所
高野芳宏 2000「多賀城・陸奥国分寺の文字瓦」『文字瓦と考古学』日本考古学協会第66回総会 国士舘大学実行委員会
内藤政恒瓦研究会 2015「宮城県を中心とする内藤政恒資料(3)」『宮城考古学』第17号
古川市教育委員会・古川市図書館 1979『郷土資料』
古川市教育委員会・古川市図書館 1980『郷土資料目録(考古)』
古川市教育委員会 1979『史跡大吉山瓦窯跡 保存管理計画』
古川市教育委員会 1995『小寺遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第18集
古川市教育委員会 2003『灰塚遺跡・杉ノ下遺跡』宮城県古川市文化財調査報告書第32集
古川市史編さん委員会 2006『古川市史6 資料I 考古』
宮城県教育委員会 1970『日の出山窯跡群一埋蔵文化財緊急調査概報一』宮城県文化財調査報告書第22集
吉野武 2016「多賀城創建期の瓦窯跡一日の出山窯跡群を中心に一」『歴史』第127輯
吉野武 2017「多賀城第I期の瓦窯跡の特徴と変化」『第43回古代城柵官衙遺跡検討会一資料集一』

【裏表紙写真 登録番号：Y2684】

報 告 書 抄 録

ふりがな	だいきちやまかわらがまあと							
書名	大吉山瓦窯跡Ⅰ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	多賀城関連遺跡発掘調査報告書							
シリーズ番号	第37冊							
編著者名	初鹿野博之(編)・矢内雅之・早川文弥							
編集機関	宮城県多賀城跡調査研究所							
所在地	〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1丁目22-1 TEL 022-368-0102 FAX 022-368-0104							
発行年月日	20220325							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'"	東経 °'"	調査期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
史跡 だいきちやま 大吉山 かわらがまあと 瓦窯跡	みやぎけん 宮城県 おおさきし 大崎市 ふるかわおぼやし 古川小林 あざうらこし 字浦越 2番12	04215	27046	38° 37' 22"	140° 55' 15"	2021年 6月1日 ～ 2021年 8月6日	145㎡	調査計画 に基づく 学術調査
				世界測地系準拠 (GRS80)				
所収遺跡名	種別	主な 時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
史跡 大吉山 瓦窯跡	生産 遺跡	奈良	窯	瓦・窯壁・須恵器・土師器・ 縄文土器・石製品			多賀城政庁跡第Ⅰ 期の瓦窯跡の発掘 調査で、窯8基を 確認したほか、軒 平瓦や鬼板などが 出土。	
要約	大吉山瓦窯跡は、多賀城政庁跡第Ⅰ期に瓦を供給した窯のひとつとして知られる。今回は窯の数・分布の確認を主目的として、地形測量と初めての発掘調査を行った。窯は平面検出が中心で8基を確認し、このうち2基は農道工事により過半が失われているが、それ以外は良好な残存状態とみられ、一部は天井崩れずに残っている可能性がある。また、窯の斜面下方には操業に伴う灰原が3か所分布し、現在の地表面でも高まりなどとして観察される。窯の分布は大きく4つの群に分けられ、複数の窯が並んで操業し、大規模な灰原を形成している状況が推定された。出土遺物には多数の瓦があり、へら書き文字瓦「下」や軒丸瓦・軒平瓦・鬼板も複数出土した。特に軒平瓦や鬼板は残りがよく、ほかの窯や多賀城跡の瓦と比較するうえで貴重な資料が得られた。							



大吉山瓦窯跡出土（左）と多賀城出土の鬼板 950C

多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 37 冊
大吉山瓦窯跡 I

令和 4 年 3 月 25 日発行

発行者 宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市高崎一丁目 22 番 1 号
TEL (022) 368-0102
FAX (022) 368-0104
印刷所 株式会社イメージパーク
